

40 解体 三重頭貫
隅仕口はアリ掛、平は輪薙込みにてほぼ良好な状態であった。



41 解体 三重軸部
軸部材、長押ともすべて当初のものである。柱の露出面の風化は大きく就中東面の風蝕は甚だしかった。現在腰貫の楔が桁行、梁行ともに下楔になっているが、大正修理時に打替えられたもので当初は梁行が上楔で、貫には3種咬合わせの仕口になっていた。



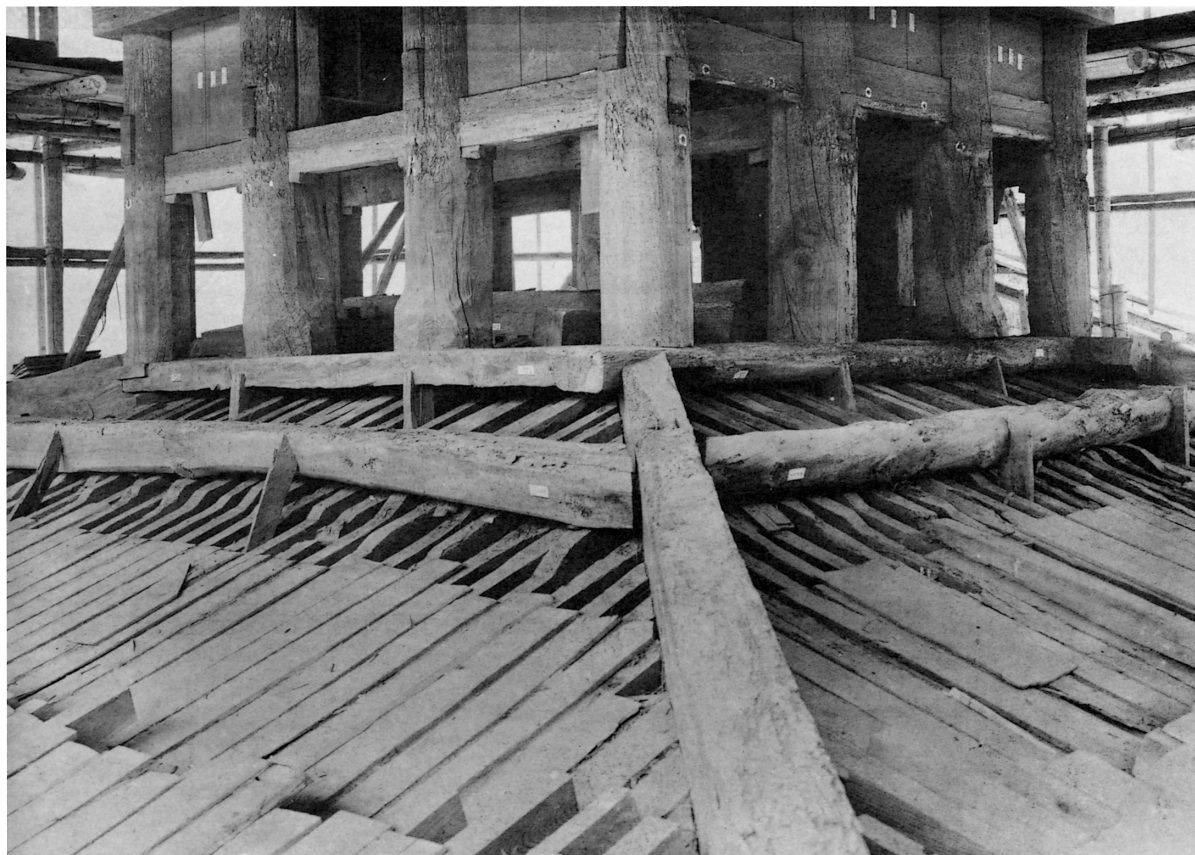
42 解体 二重野極

四隅の配付極に各3本当初のものと見られる極が残存していた。約5.1糎角の松材で曲手に金斧はつり、他の2面は挽肌で野地木舞の当り跡、留釘穴も残っていた。その他のものは5.1糎の杉換立材で野隅木ともに大正9年に新補されたものであった。



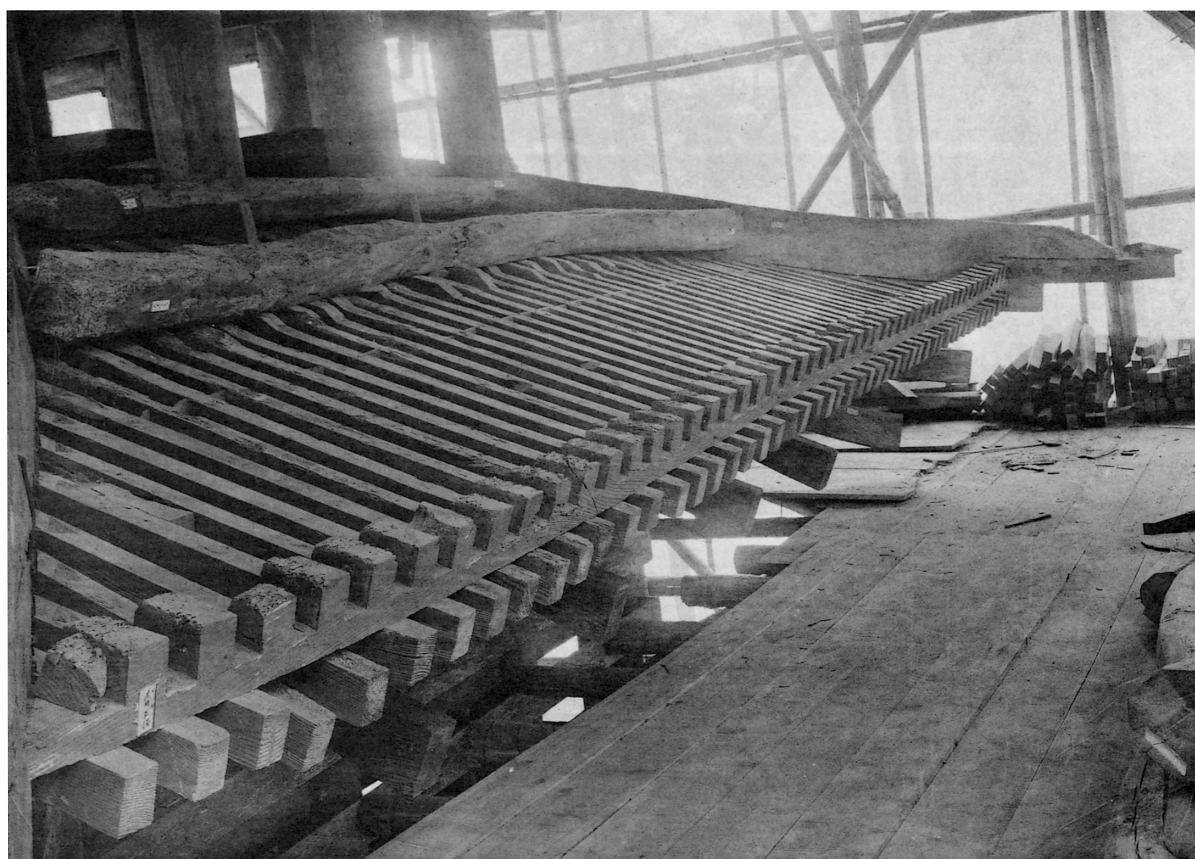
43 解体 二重小屋組

腰組束、桔木、野隅木ともに大正修理に取替えられたものである。腰組束枕には東面に飛檐部分を切断された旧三重の化粧木と西面に旧左儀長束2本が転用されていた。



44 解体 二重化粧裏板

地極の裏板は当初のもので、飛檐裏板は後補のものであった。



45 解体 二重木負

木負は東面中央部16支、南面東より18支が取替えられていたが、その他は初のもので、打替えられた痕跡もなかった。

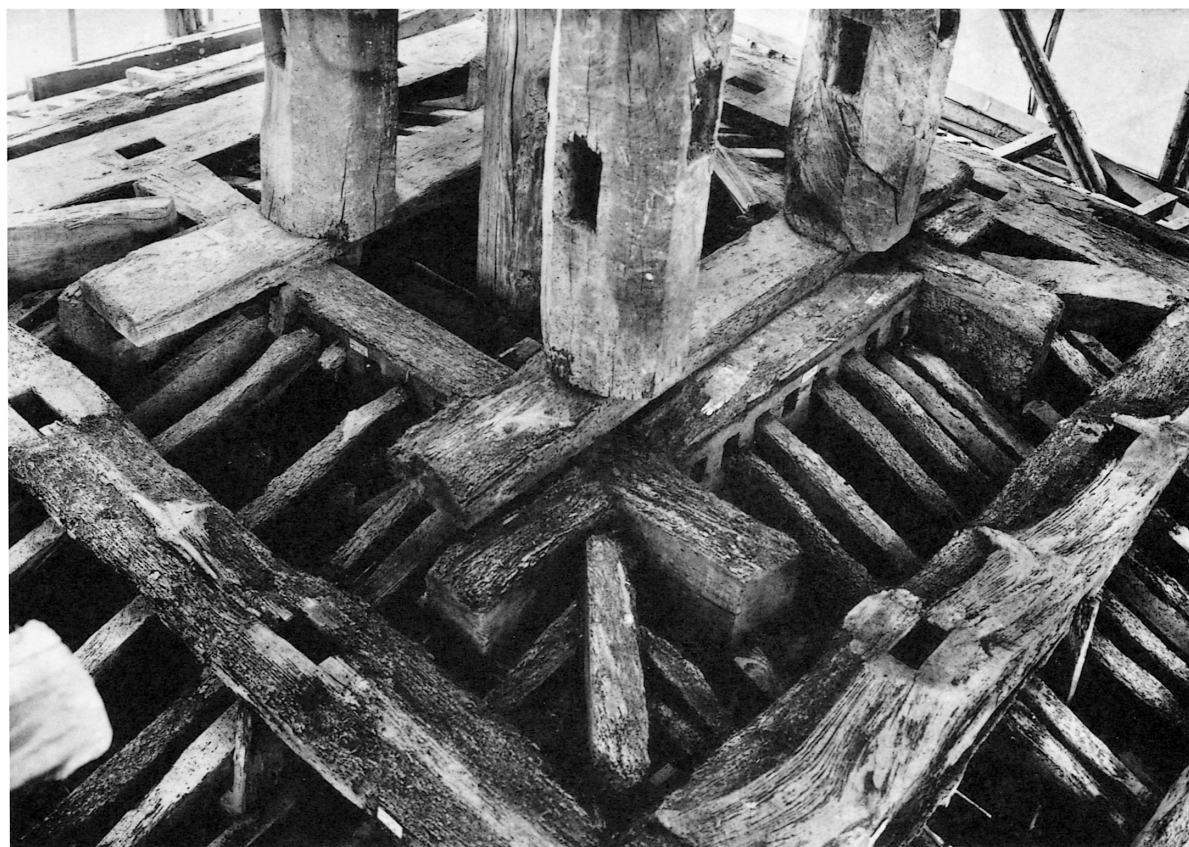
46
解体 二重地極

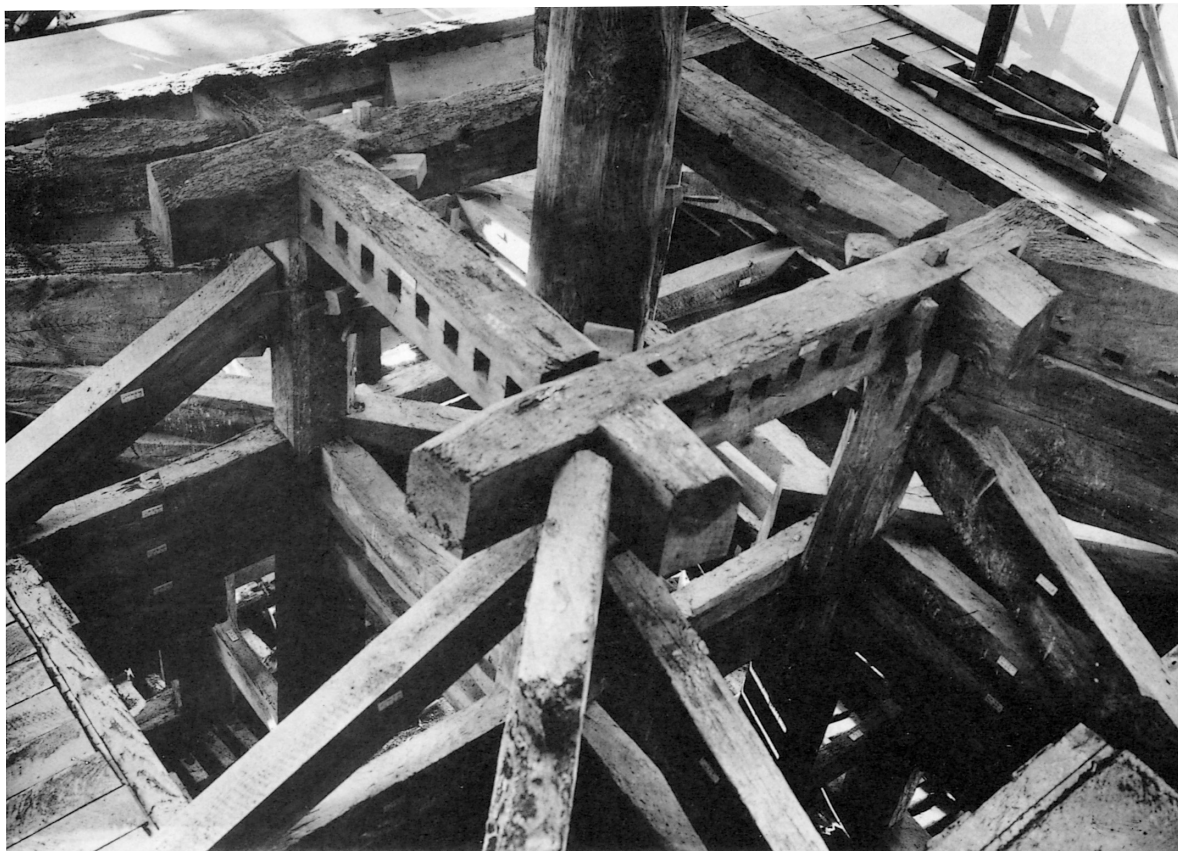
各面とも地極はすべて当初のものであったが、飛檐極は全部取替えられていた。
化粧隅木は西面両隅は当初のもので、東面両隅は飛檐部分が先継されていた。



47
解体 二重四天束

四天束、束台とも当初のもので、束台は甚だしく腐朽していた。





48 解体 二重 極 掛

極掛の上端面の腐蝕が大きかったが、他面は比較的良好であった。当初のもので松材。



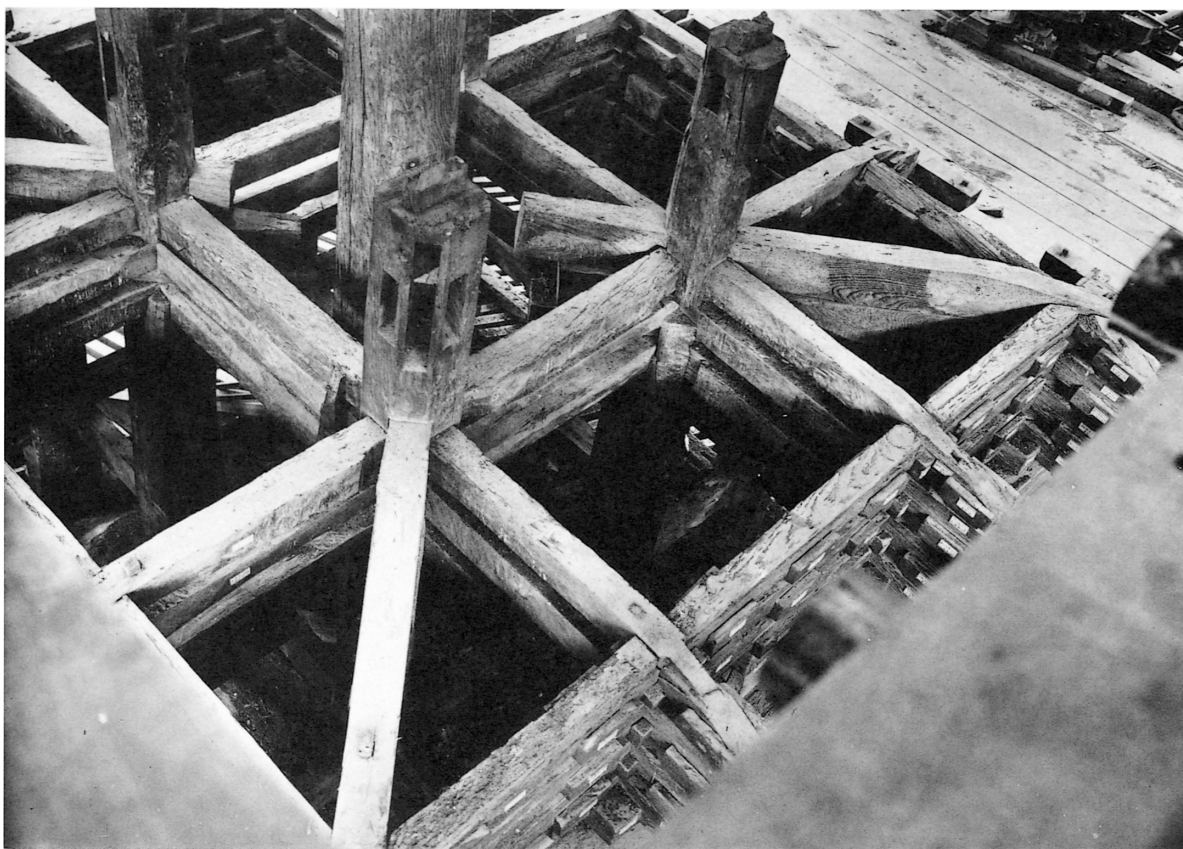
49 解体 二重 斗 栱

大斗、卷斗は楠材、その他は松材ですべて当初のものである。卷斗及び通肘木に慶長14年申7月9日及び鈴木久三郎の墨書があった。



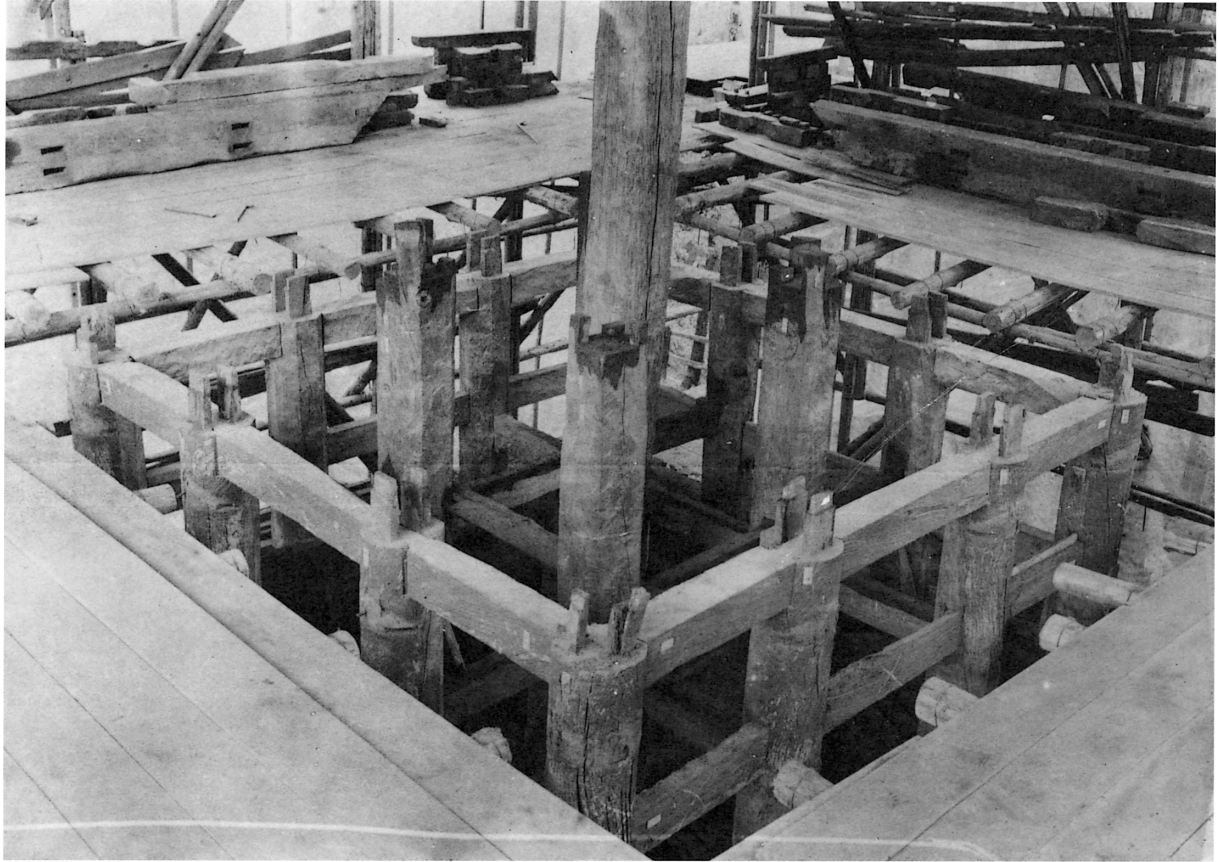
50 解体 二重尾極

東面中央2本は大正修理に取替えられていたが、その他は当初のもので腐朽が著しかった。

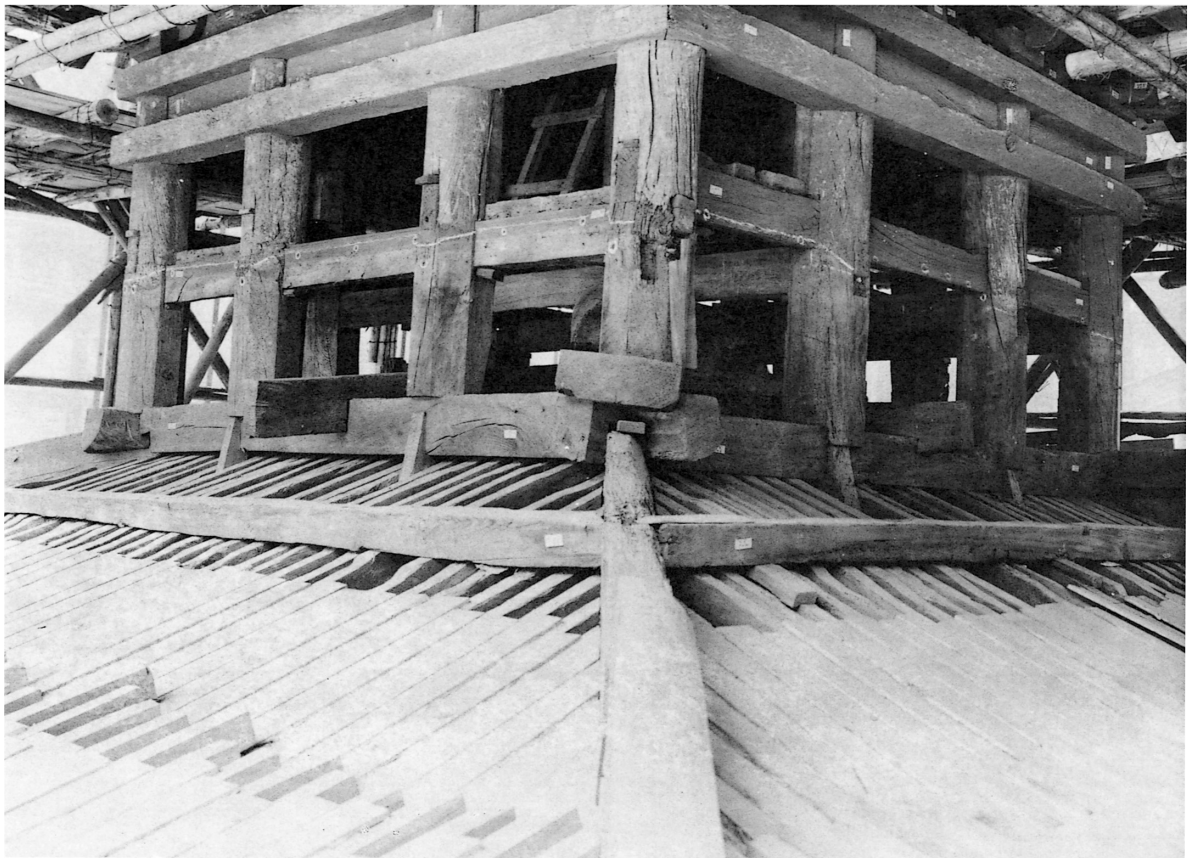


51 解体 二重通肘木

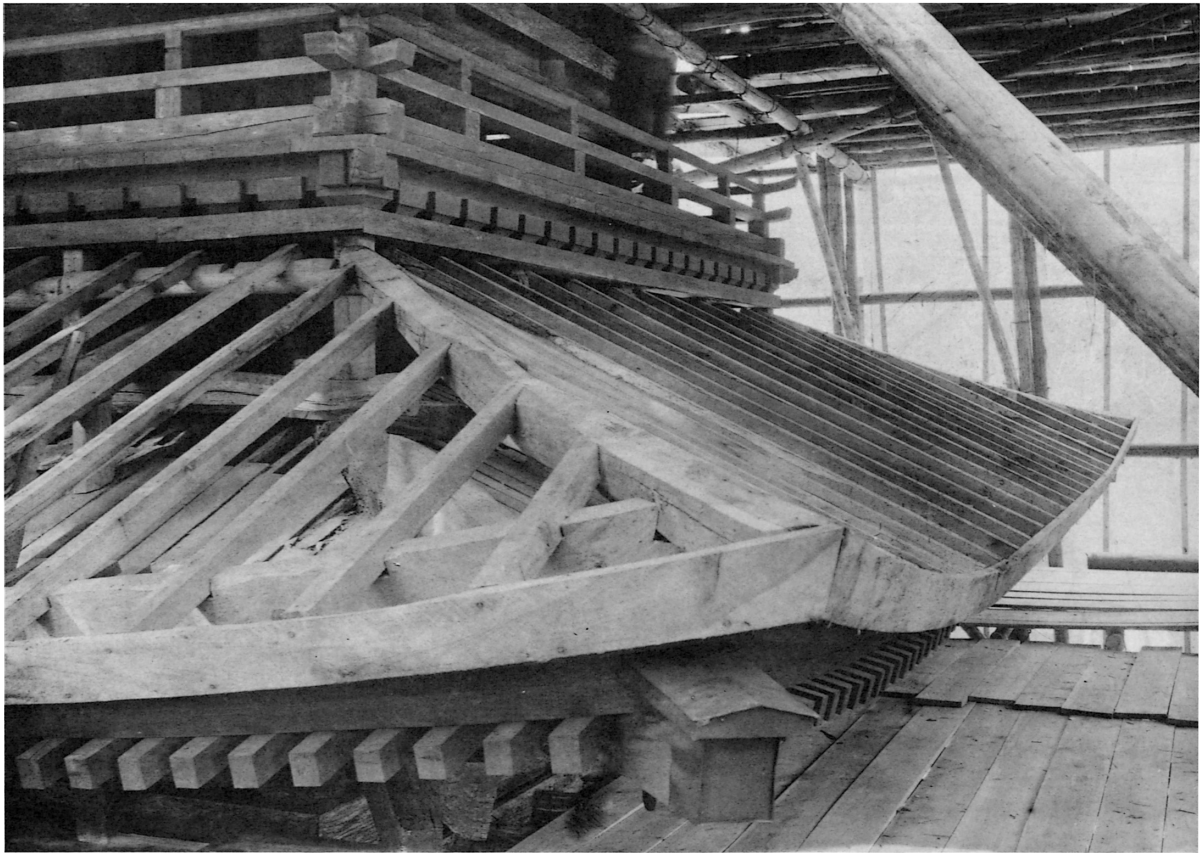
肘通木と尾極組手仕口は胴付だほ入れになっていた。



52 解体 二重軸部 (其の1)
柱頭杓は台輪を通し大斗に2枚納入になっていた。

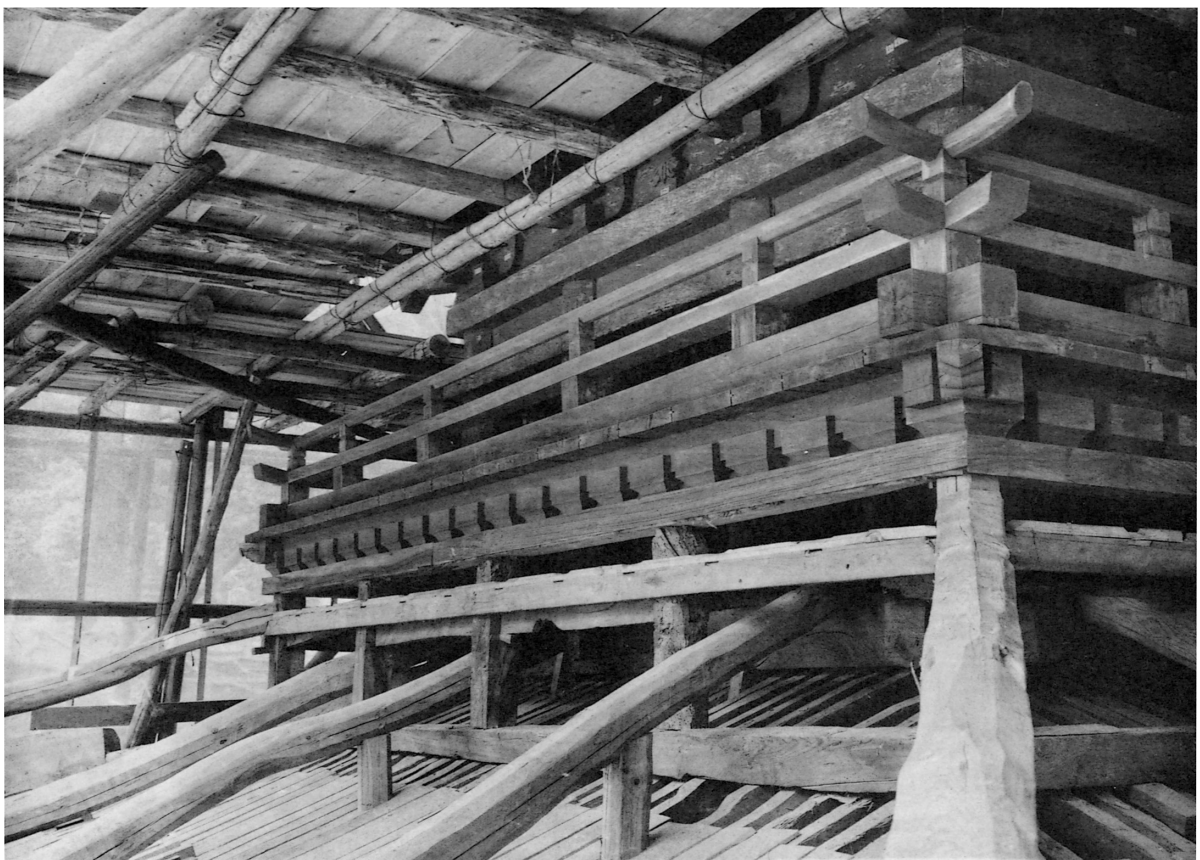


53 解体 二重軸部 (其の2)
軸部、長押ともすべて当初のもので松材である。柱露出面の風化は大きく東面柱脚部の腐朽は甚だしかった。



54 解体 一重野極

野極及び野地板ともすべて大正修理に取替えられていた。



55 解体 一重小屋組及腰組

桔木、母屋、束とも大正修理にて取替えられたもので、鼻母屋には旧茅負が転用されていた。

腰組の巻斗86ヶの内25ヶは当初のもので東面及び南面東寄りに使用されていたが、その他のものはすべて前記修理時に取替えられたものであった。



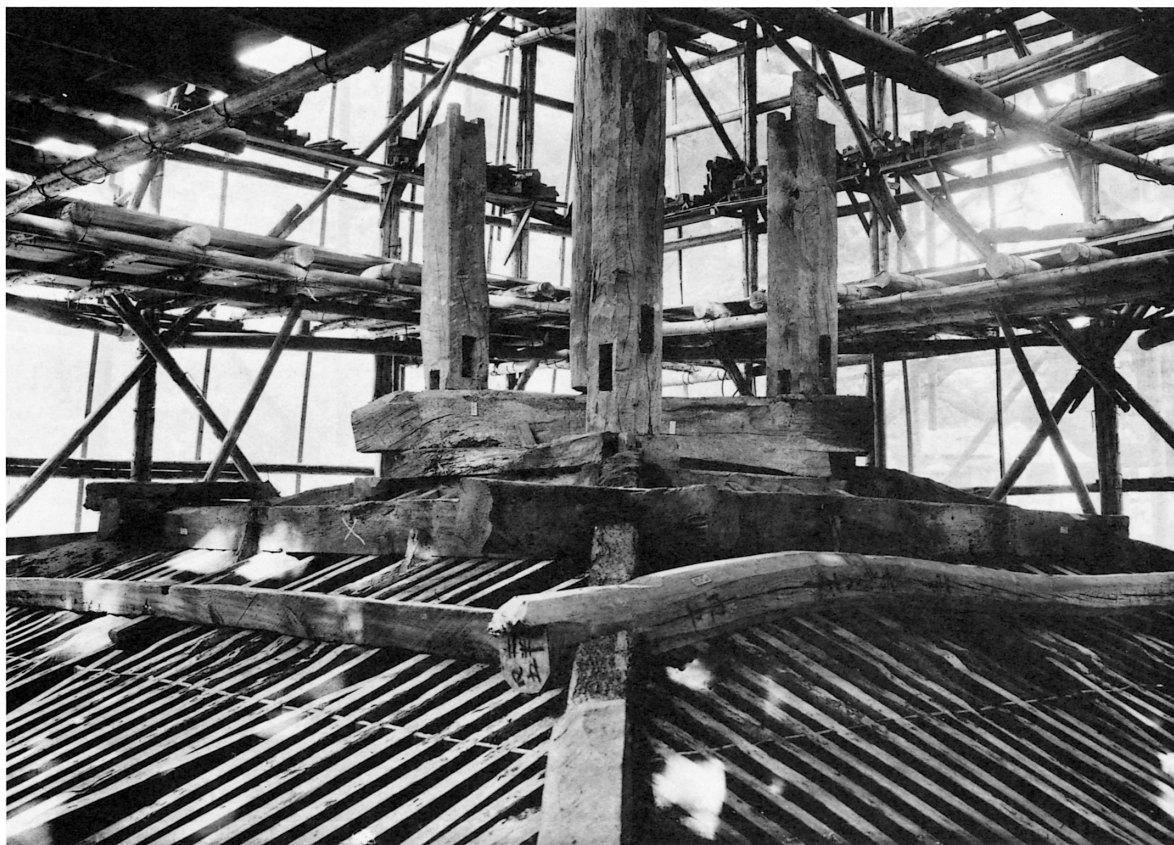
56 解体 一重軒廻

茅負、飛檐桷はすべて大正修理時取替えられたものであったが、地桷は8本新補されているだけで、他は当初のもので木負は約1/2が取替えられていた。



57 解体 心柱受梁

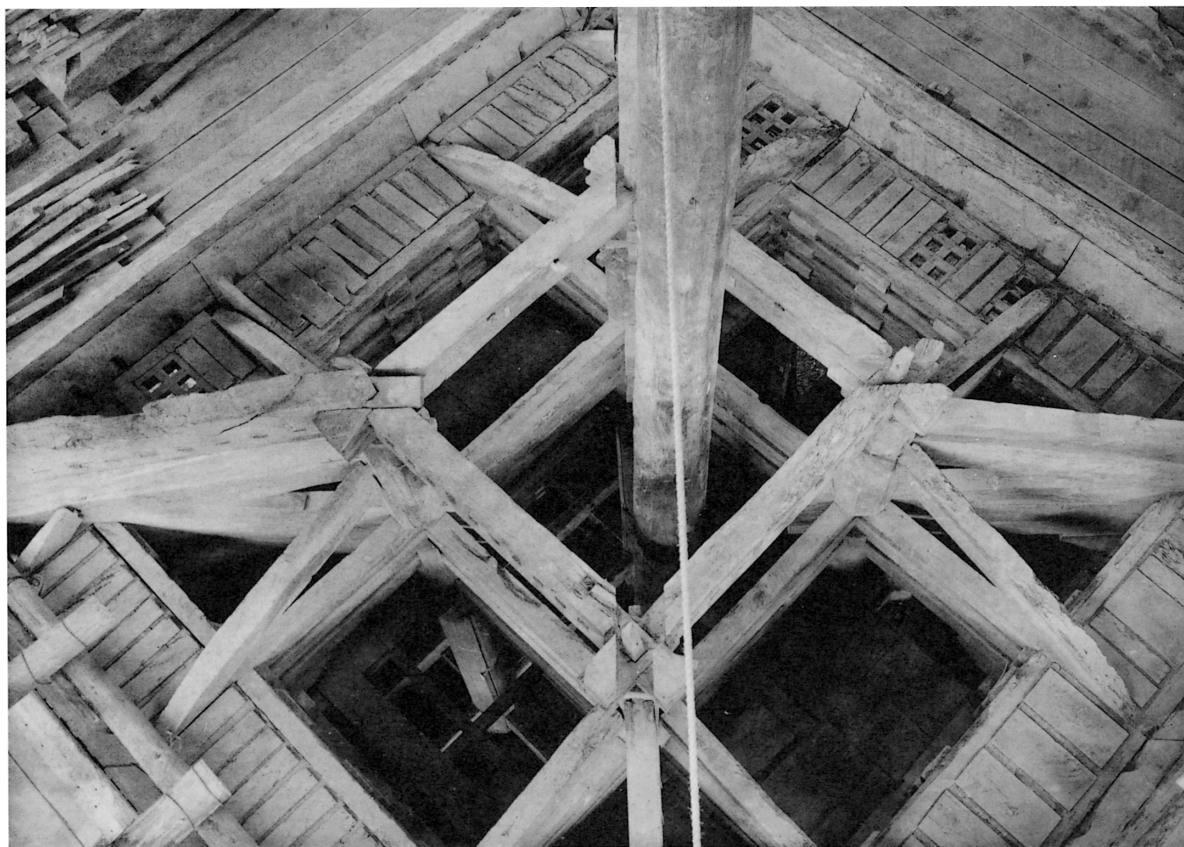
受梁は西南隅より東北隅に架構してあり、四天束、桷掛とも松材で当初のものである。



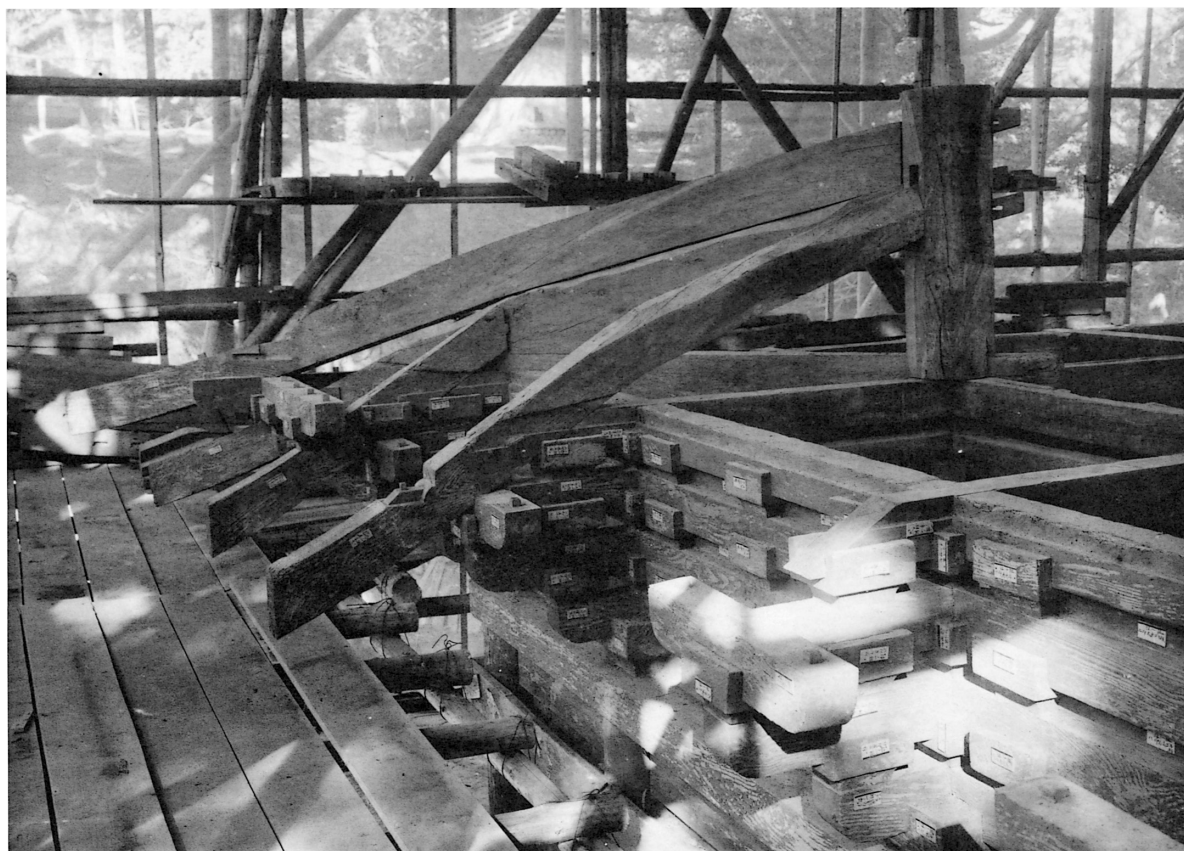
58 解体 一重土居桁及腰組束枕
土居桁は当初のもので、束枕は後補のもので、いずれも松材である。



59 解体 一重 檼掛
各面とも中2本の檼尻を突通し鼻栓打ちにしてあった。



60 解体 初重隅木尻
初重の隅木尻は四天束杓に差し鼻栓打ちになっている。

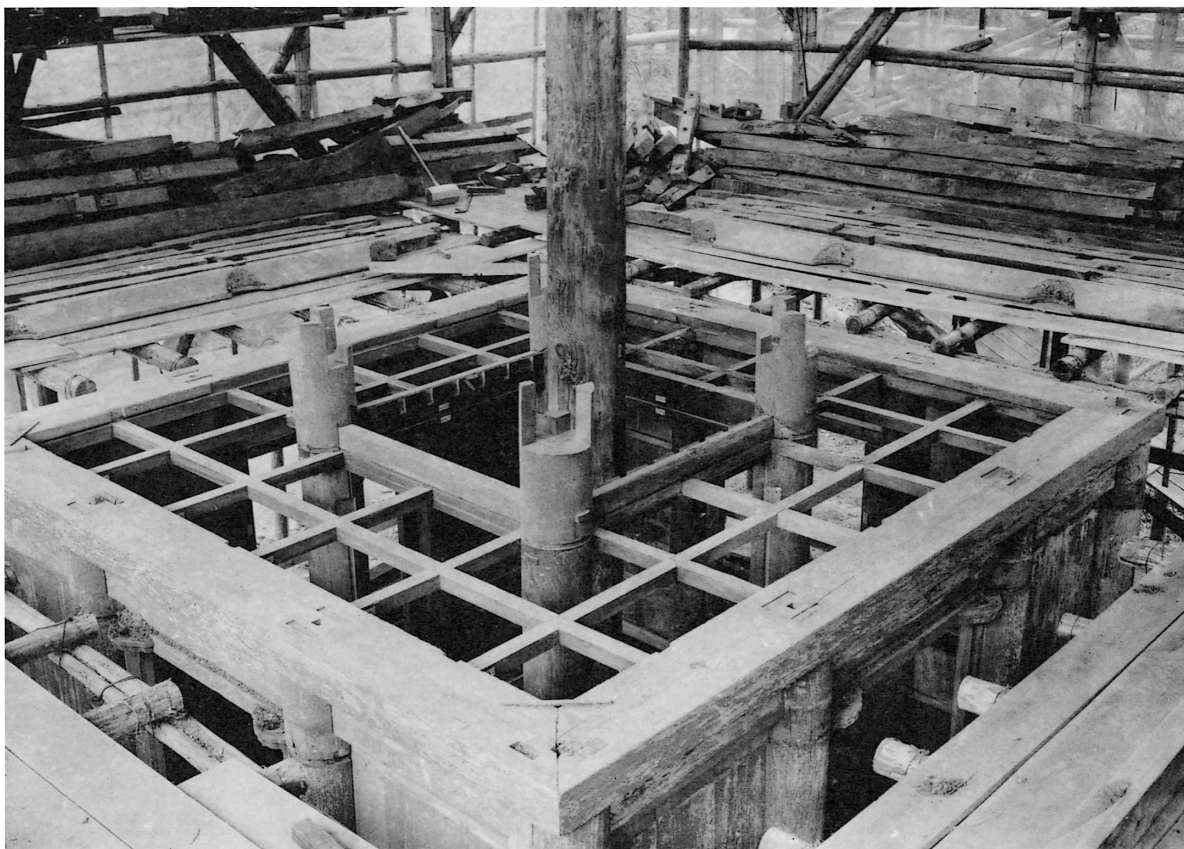


61 解体 初重尾樑
初重尾樑は柱真上にへの字形に木柙りにされ、尾樑尻は四天束に杓差し、鼻栓打ちにしてあった。尾樑はすべて当初のもので松材である。



62 解体 初重斗栱

斗栱はすべて当初のもので松材、通肘木と尾極組手は斜突付の簡単な仕口であつた。



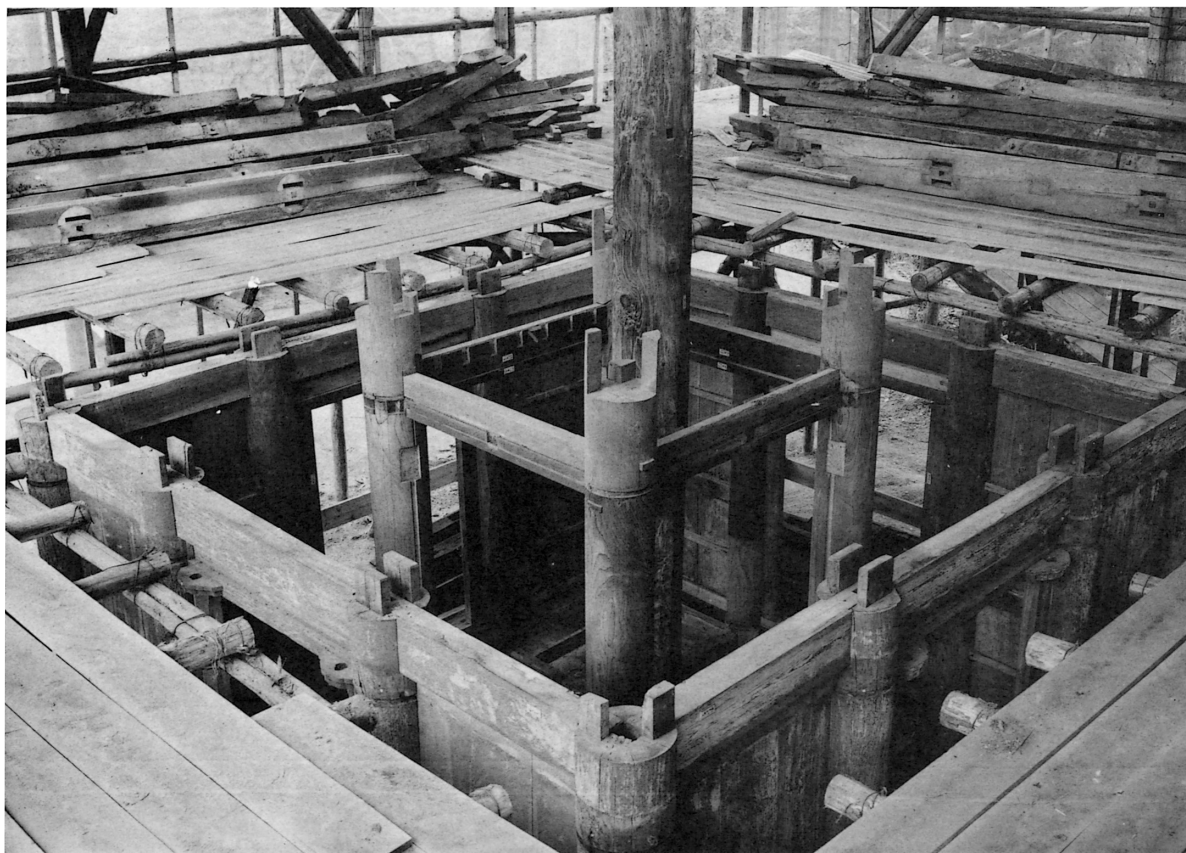
63 解体 初重台輪及天井格縁

台輪は柱に2枚納差、天井格縁は台輪と四天柱飛貫に大入れ、いずれも当初の松材である。

64 解体

初重頭貫

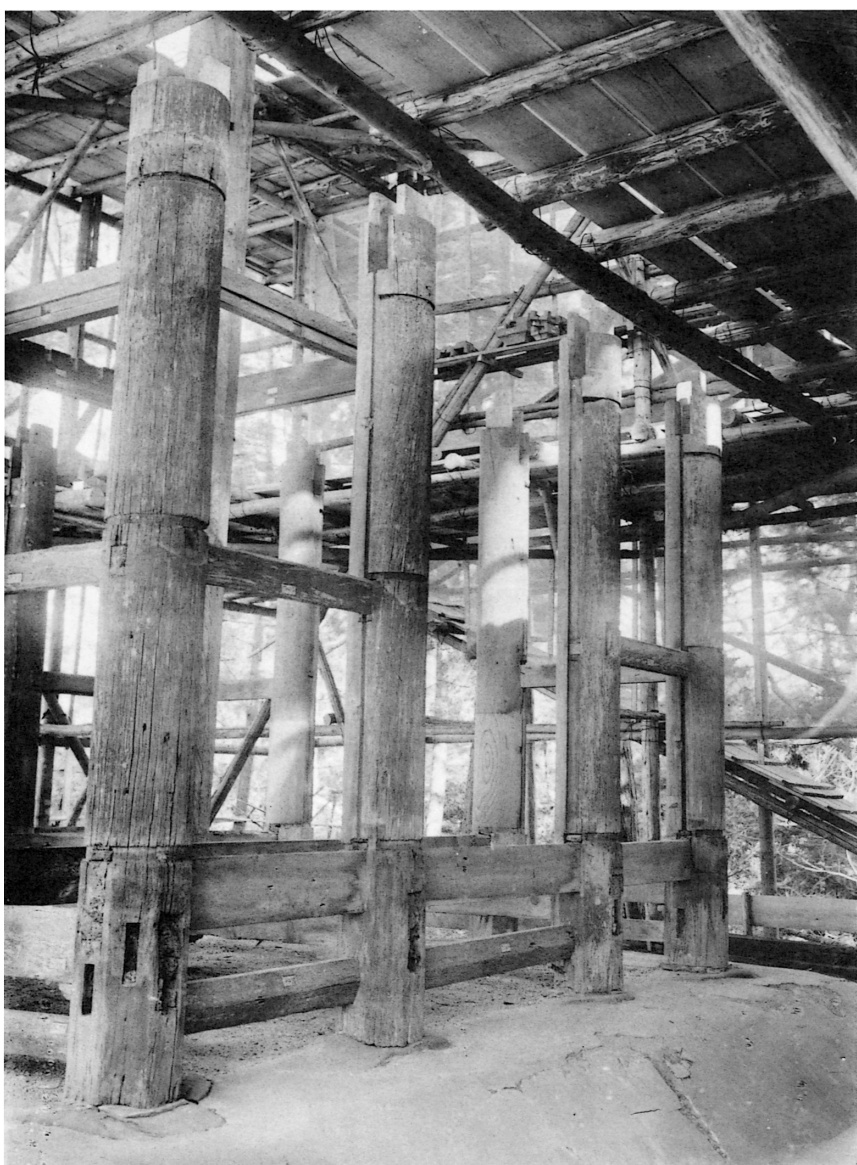
頭貫は平柱には輪薙込み、隅柱には大入れになっており、台輪にて固定していた。

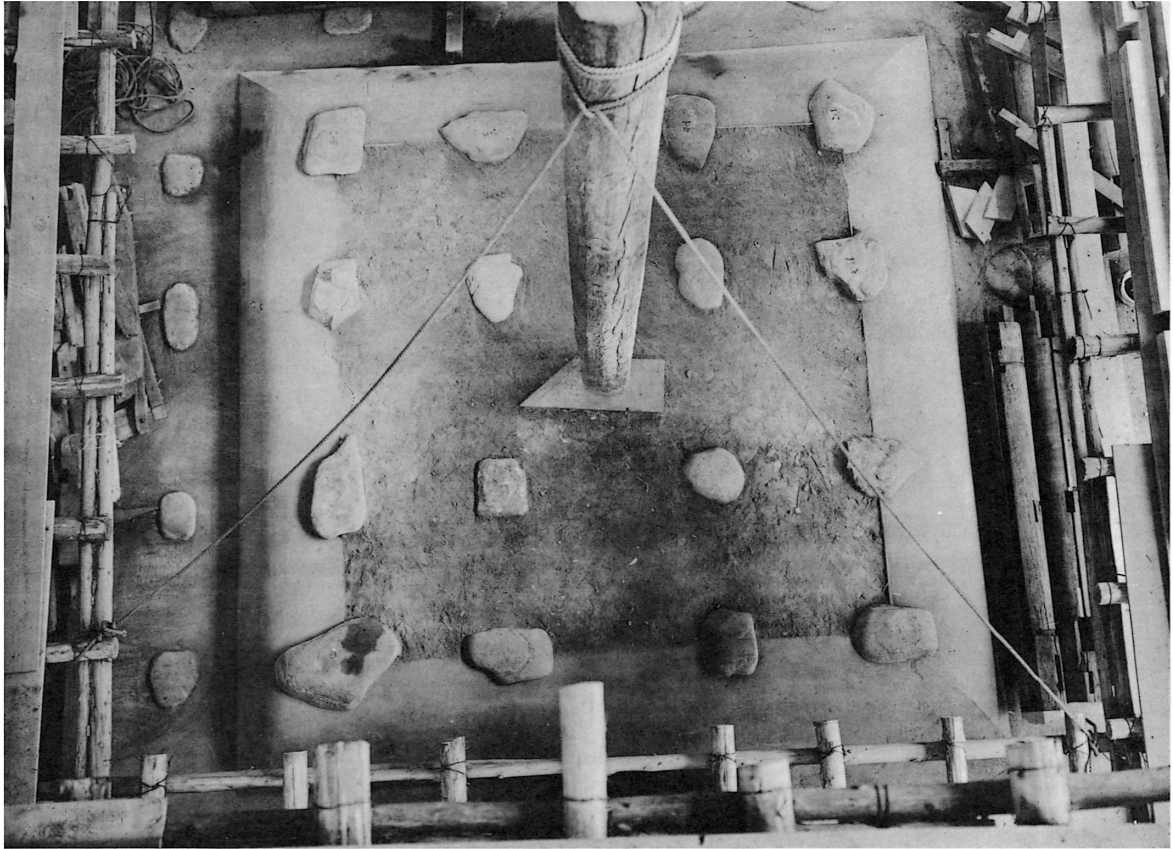


65 解体

初重軸部

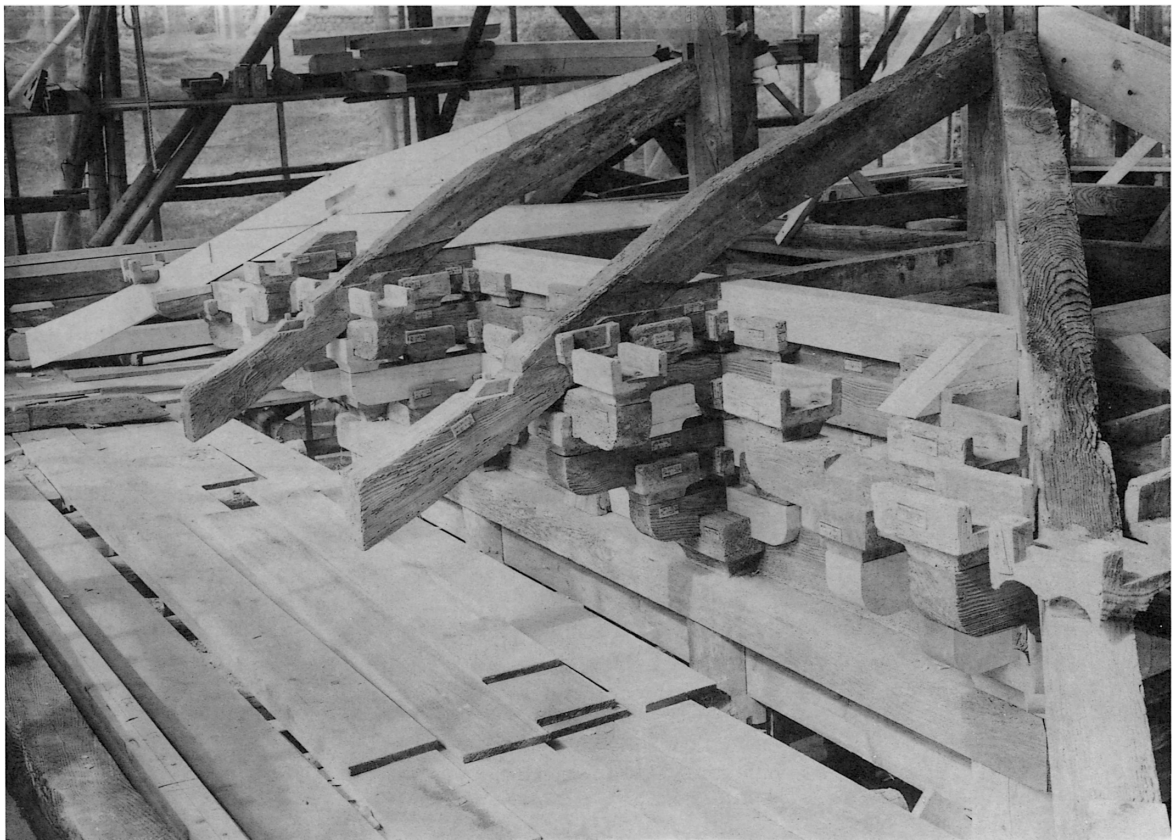
側柱は椎材で四天柱は樺材になっていた。いずれも当初のもので東面中央二本は宝暦年間に根継されていたほか、側柱五本の石口には飼物が施されていた。





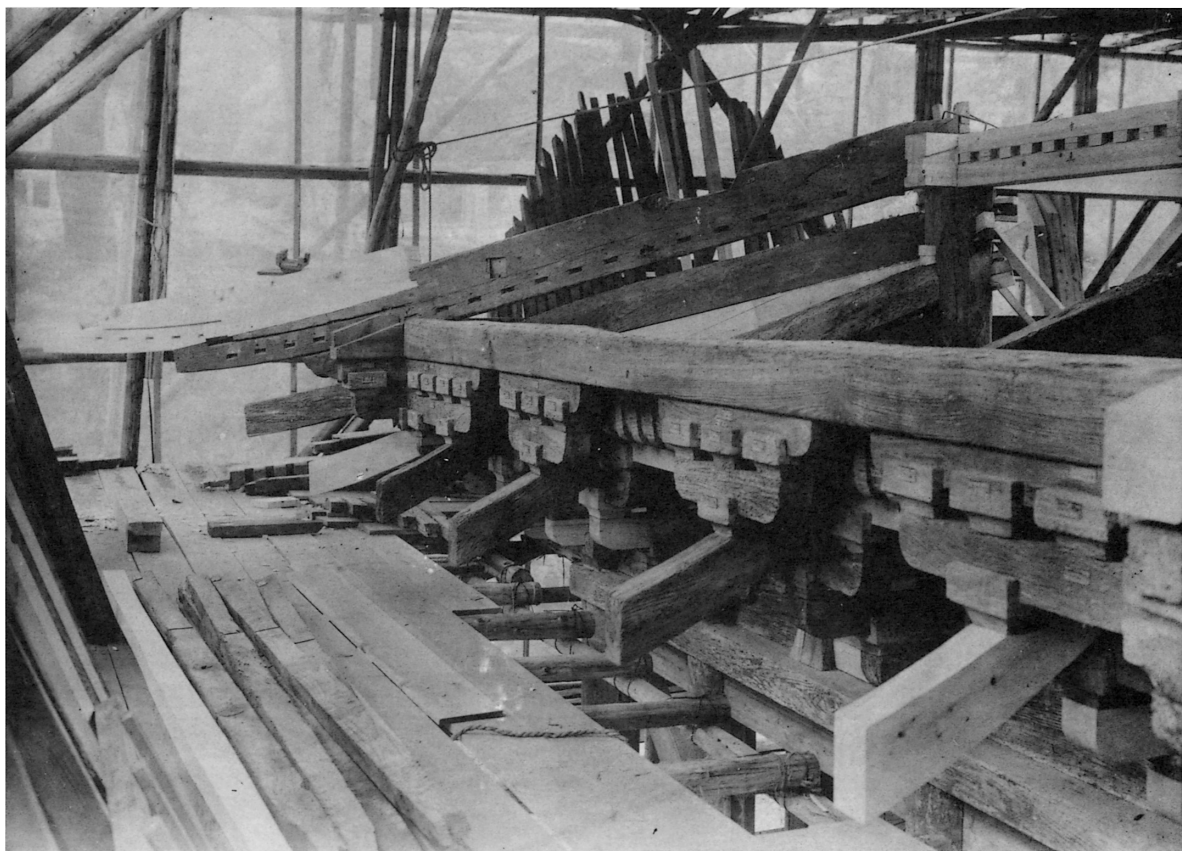
66 組立 礎 石

柱石は布堀コンクリート地業の上に据え付け、縁束石は壺堀コンクリート地業の上に据え付けた。



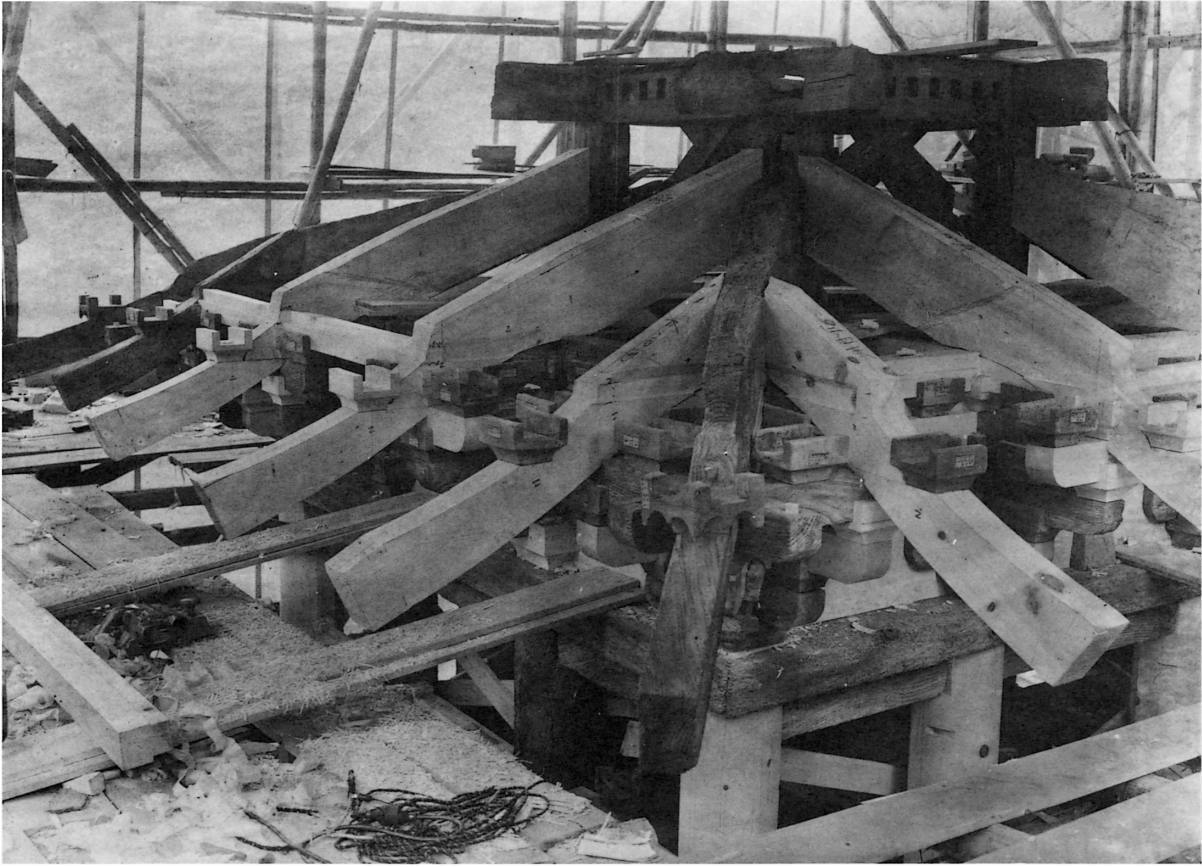
67 組立 初重斗拱

68 組立 初重桁廻



69 組立 初重小屋組





70 組立 二重斗拱



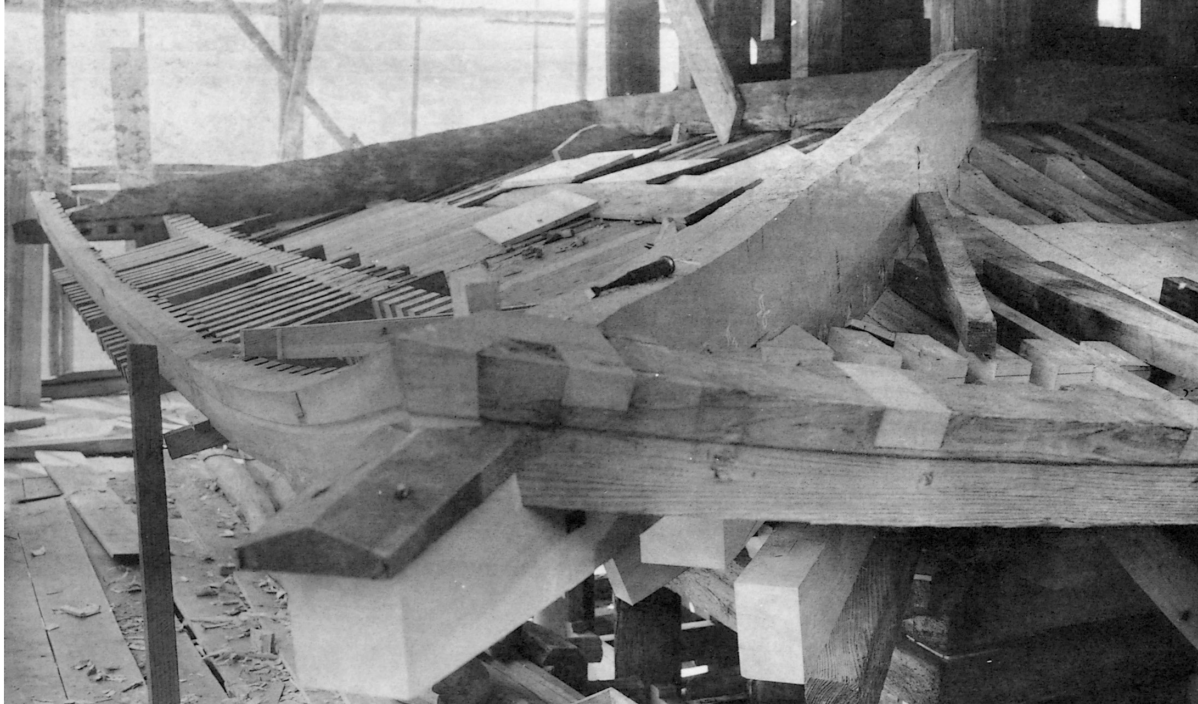
71 組立 二重桁廻

72

組立

二重軒廻

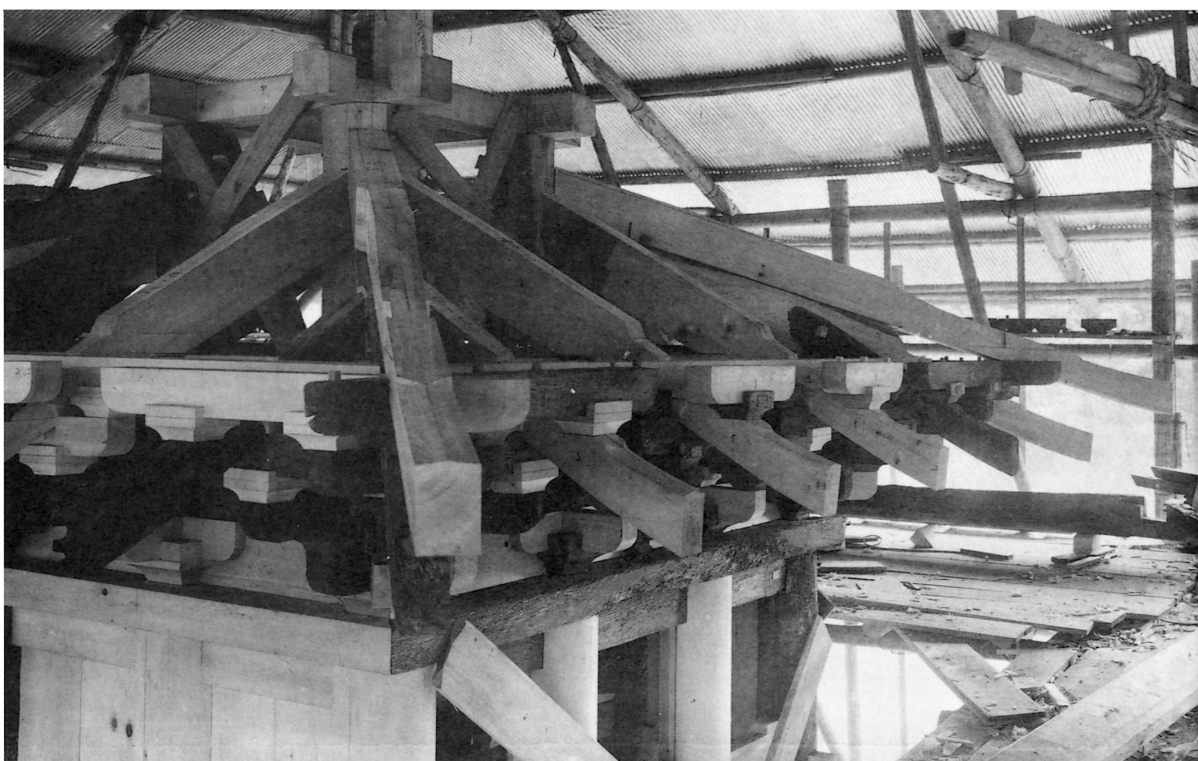
発見の旧茅負を再用する。



73

組立

三重斗栱



74

組立

三重桁廻

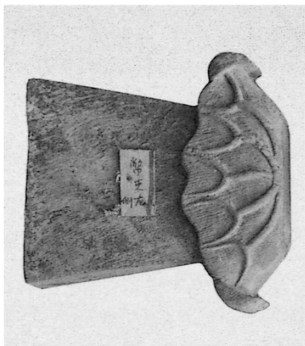




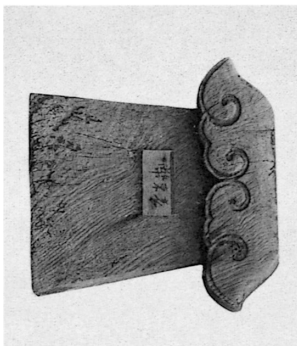
82 二重隅木持送



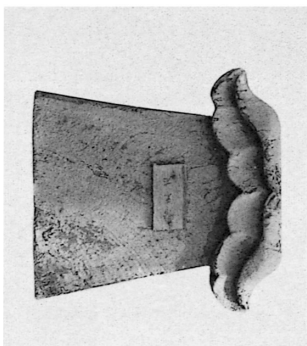
83 三重隅木持送



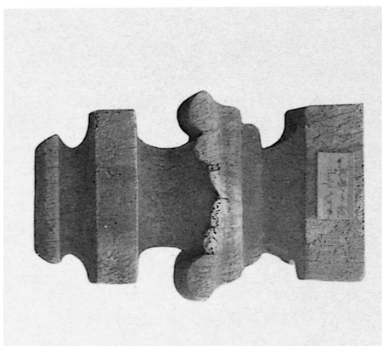
78 二重北面簀束



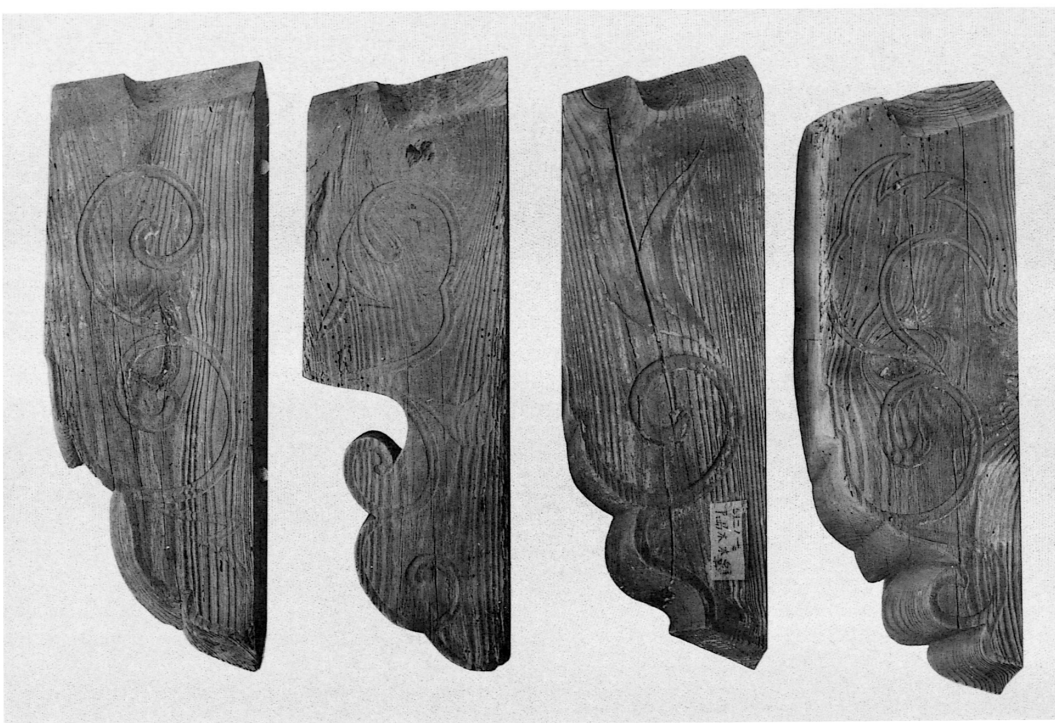
79 二重東面簀束



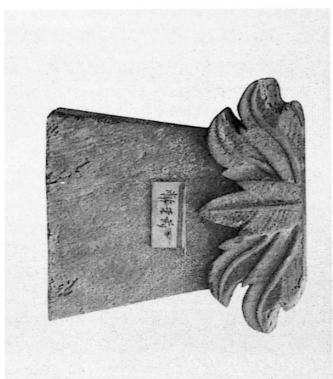
80 二重南面簀束



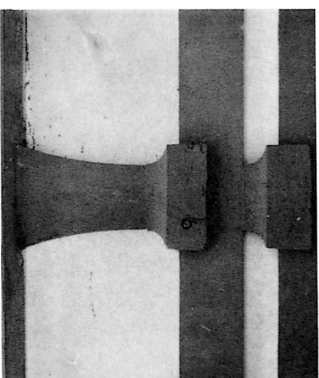
81 三重簀束



75 初重隅木持送



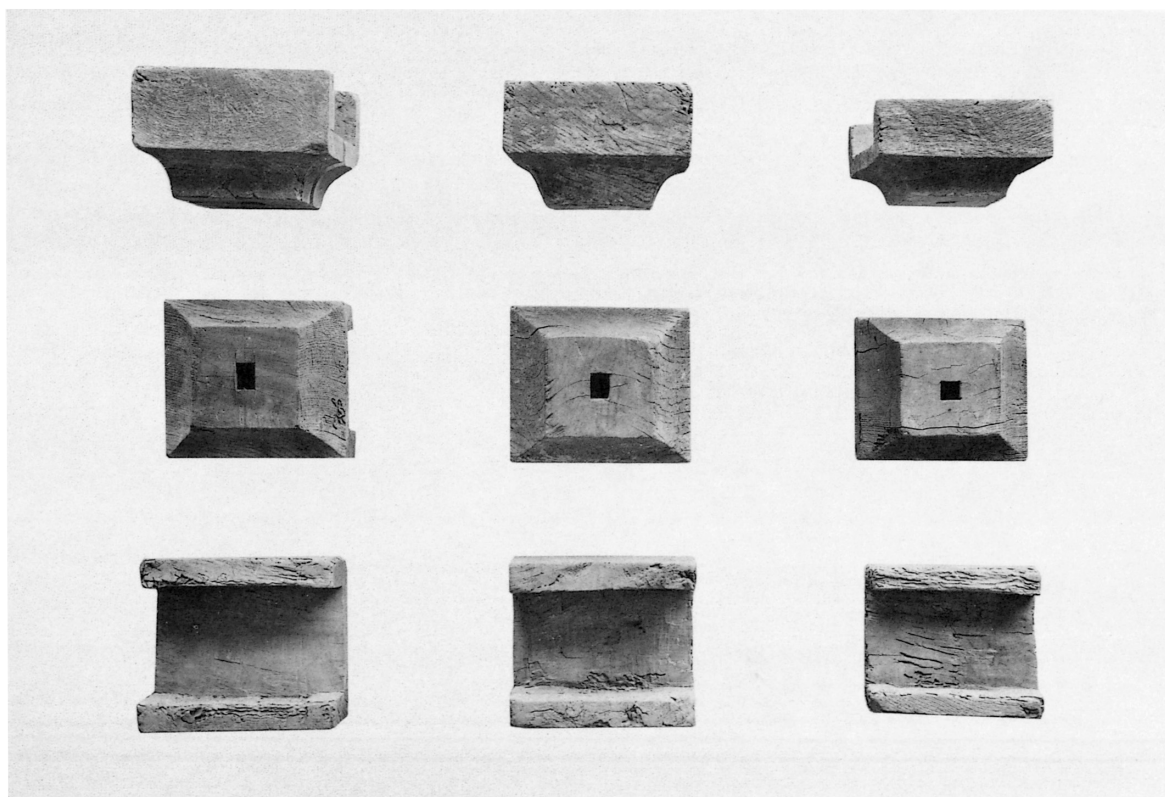
77 二重西面簀束



76 初重間斗束

84

各重卷斗



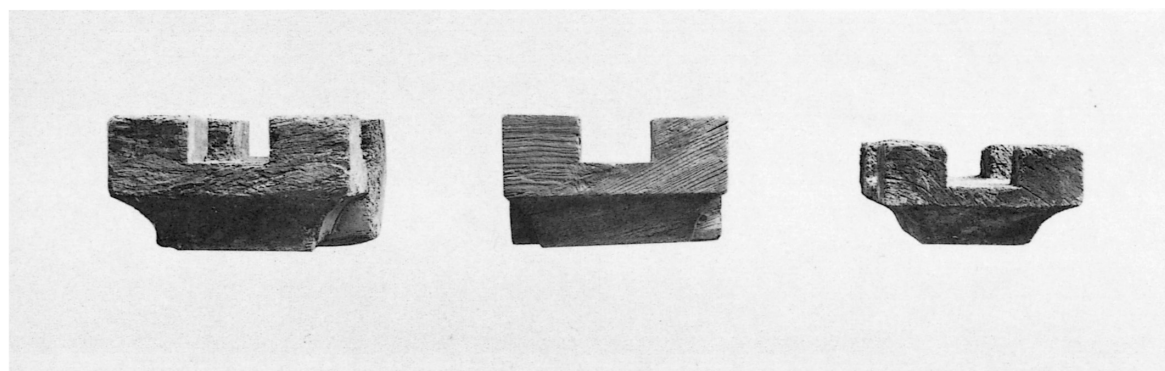
初重卷斗

二重卷斗

三重卷斗

85

各重大斗



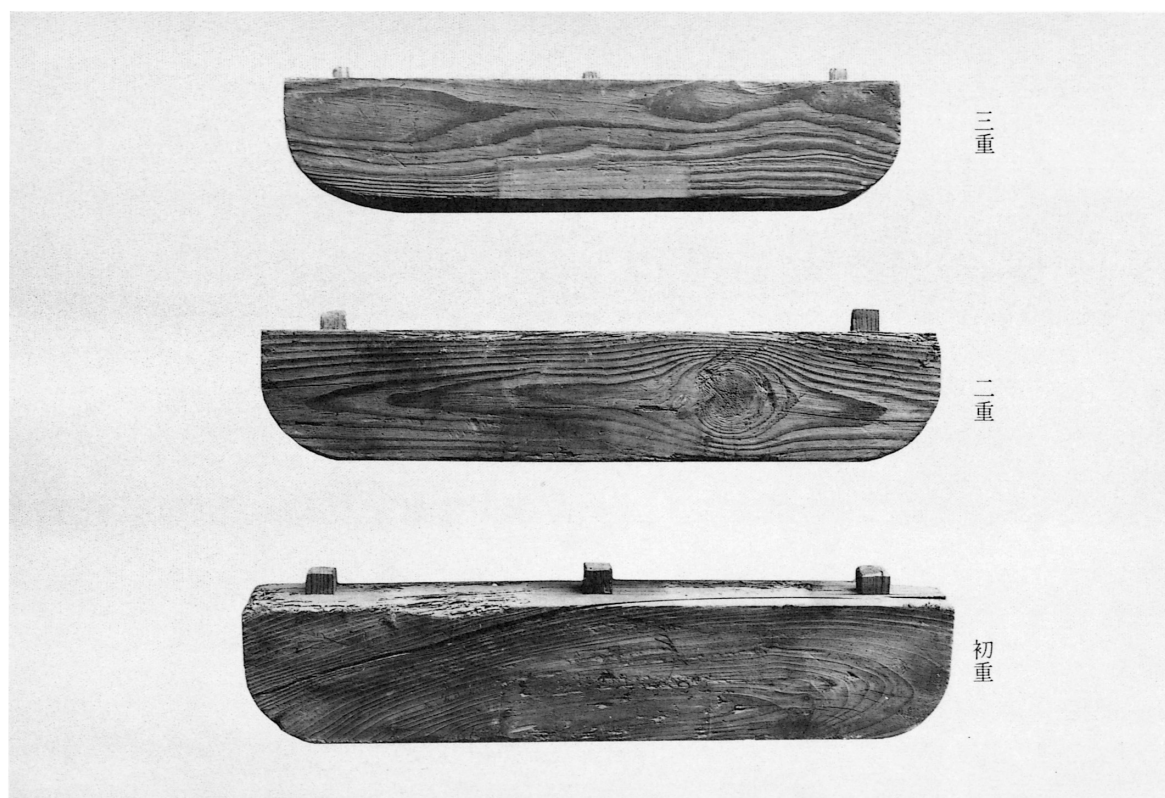
初重大斗

二重大斗

三重大斗

86

各重秤肘木



二重

二重

初重

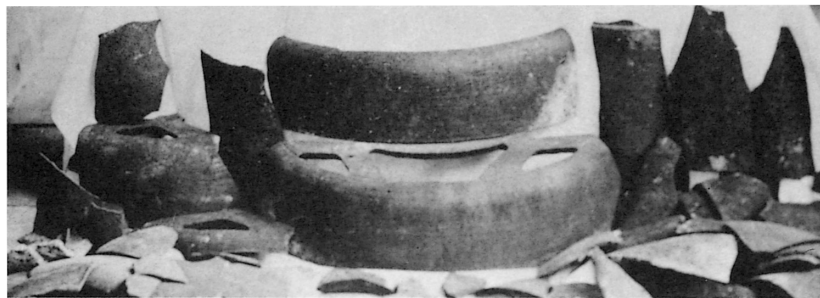
88

保存されていた宝珠、童車



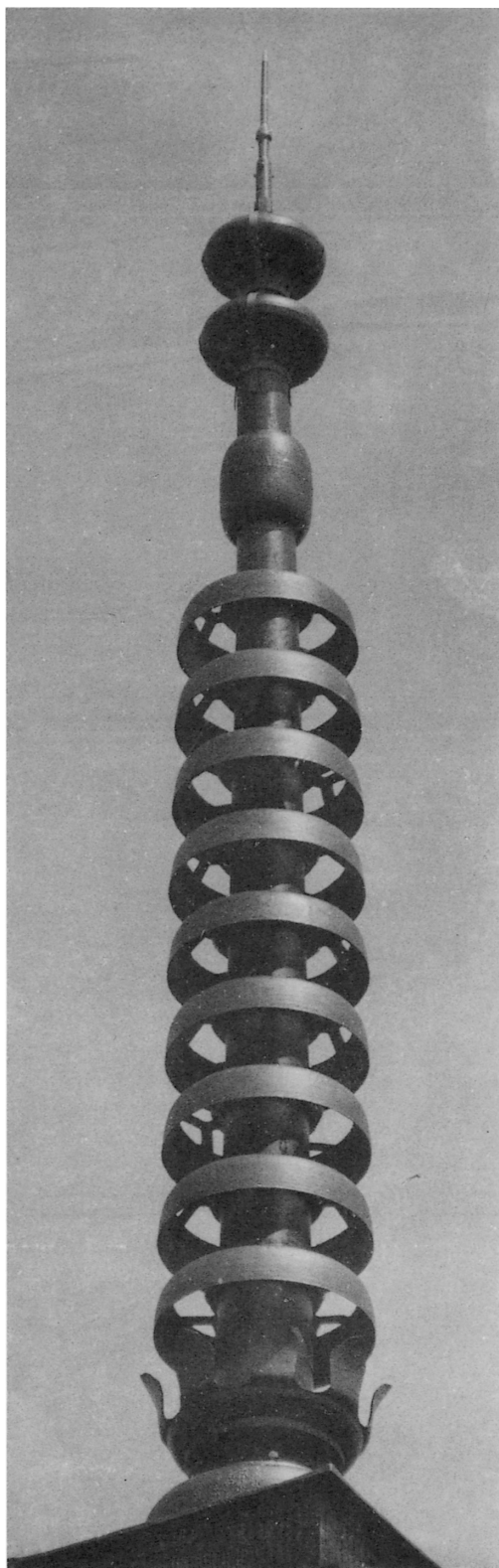
89

の破片
保存されていた九輪



90

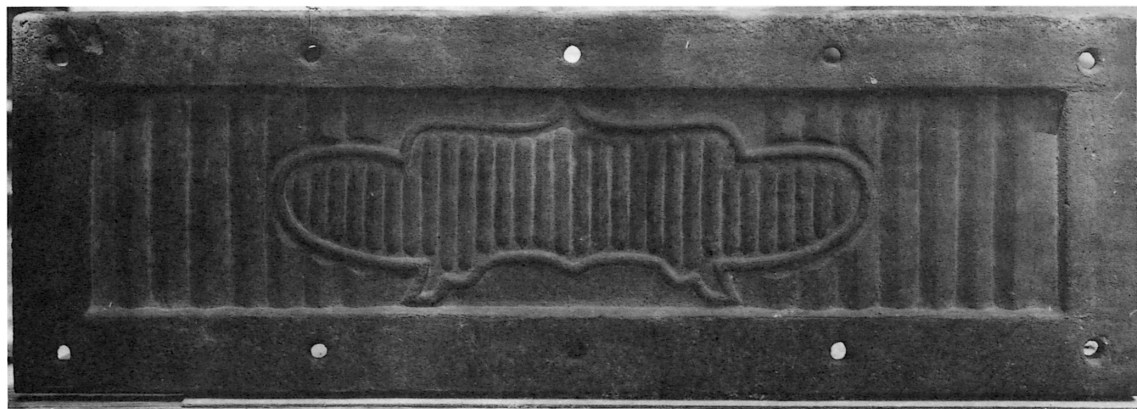
請花、伏鉢



87 組立相輪

92

露盤

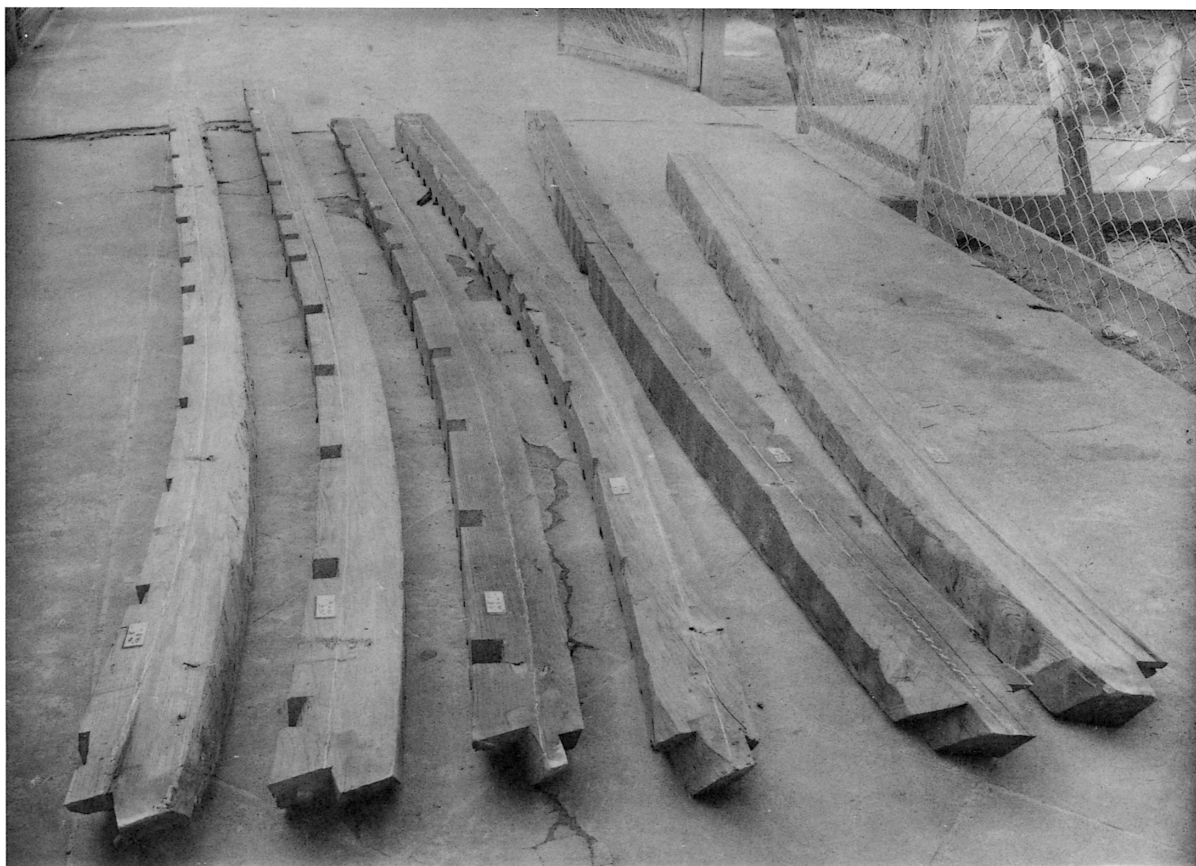


91 風鐸



93

資料 一重の鼻母屋に転用されていた旧茅負



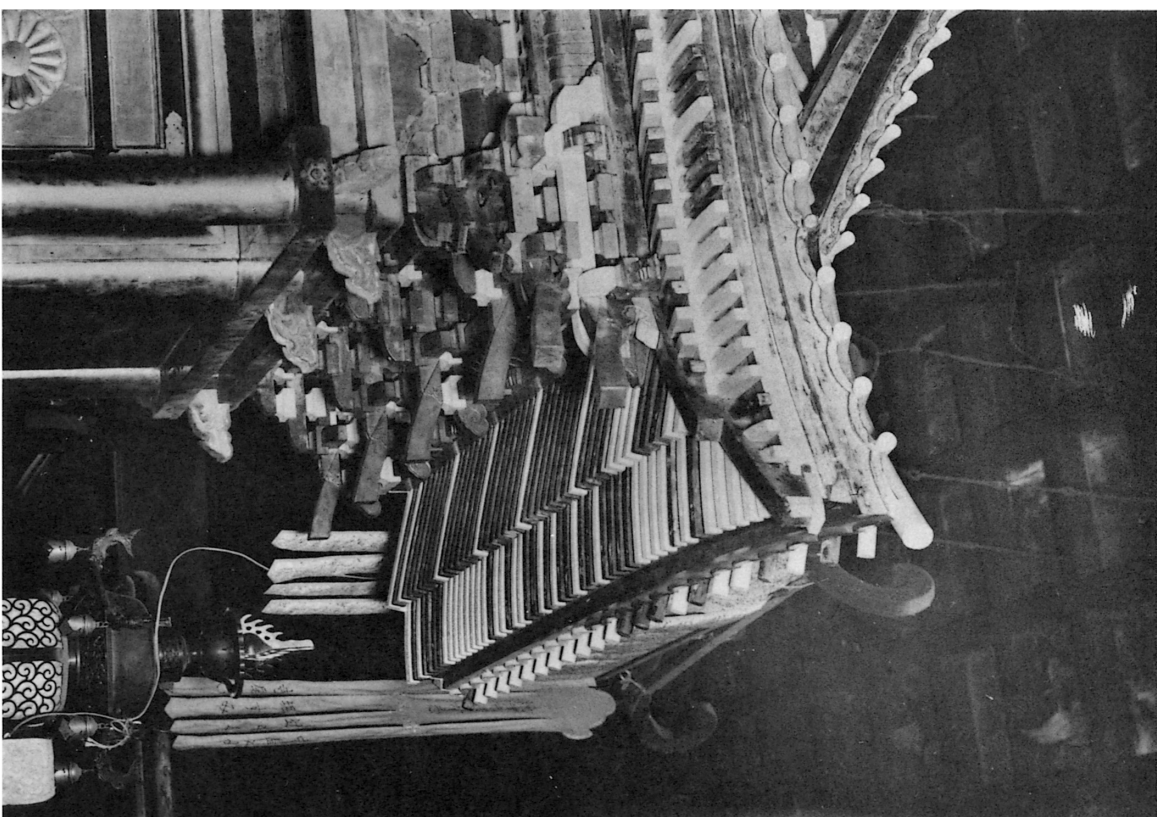
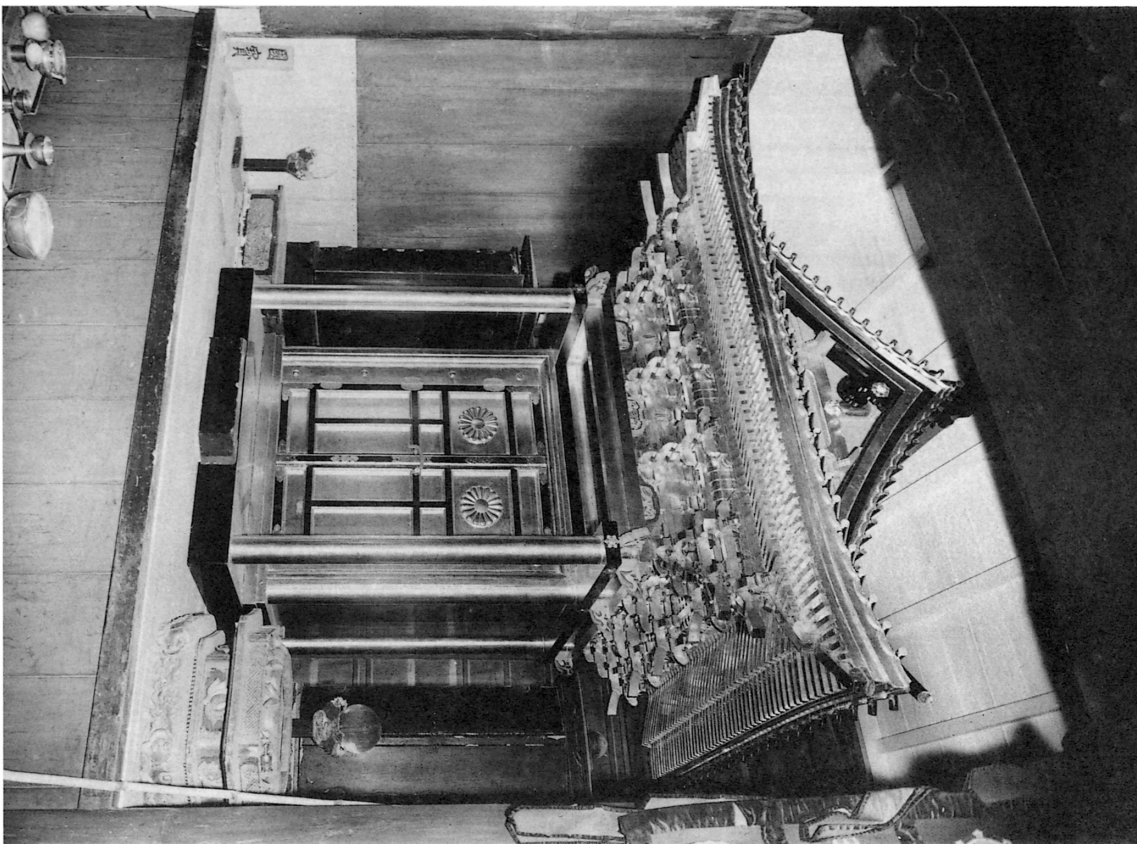
94

資料 旧裏甲、巻斗、飛檐杵



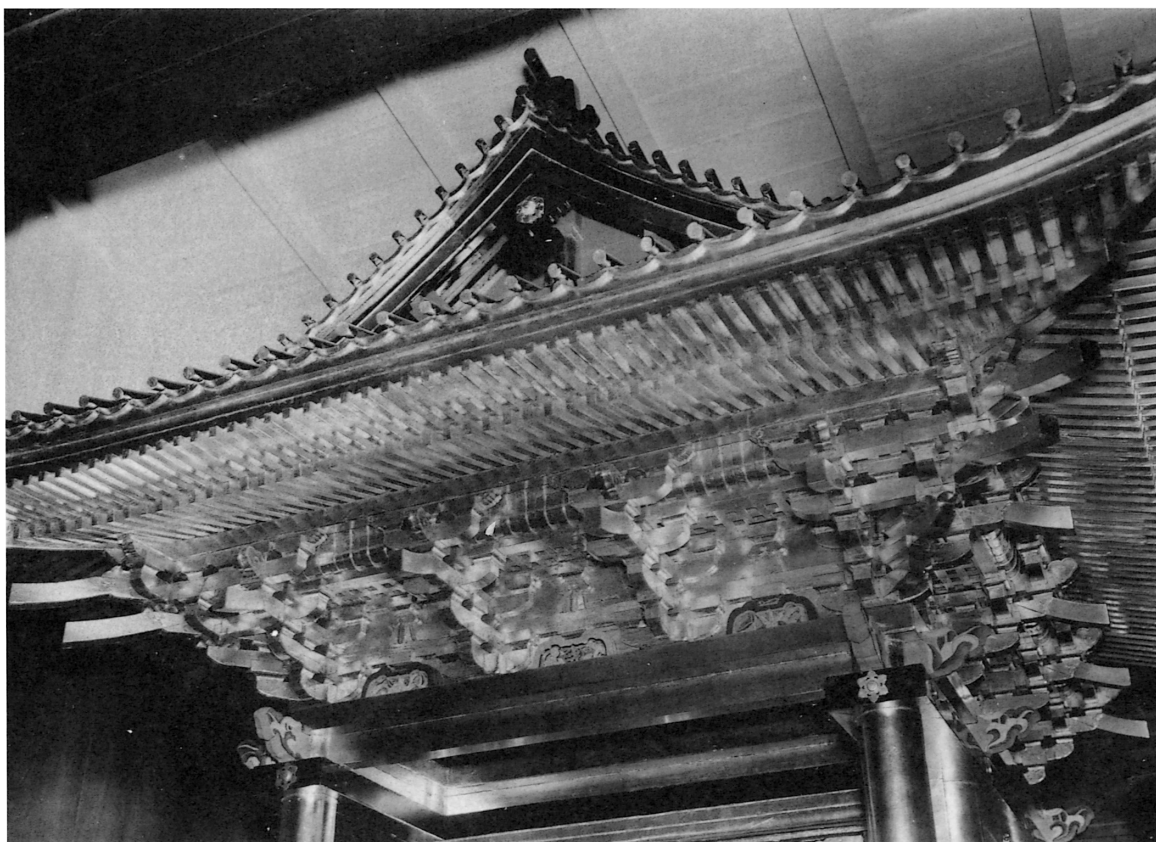
飛檐杵は野杵に転用されていた。裏甲、巻斗は二重東側の小屋内に保管されていた。





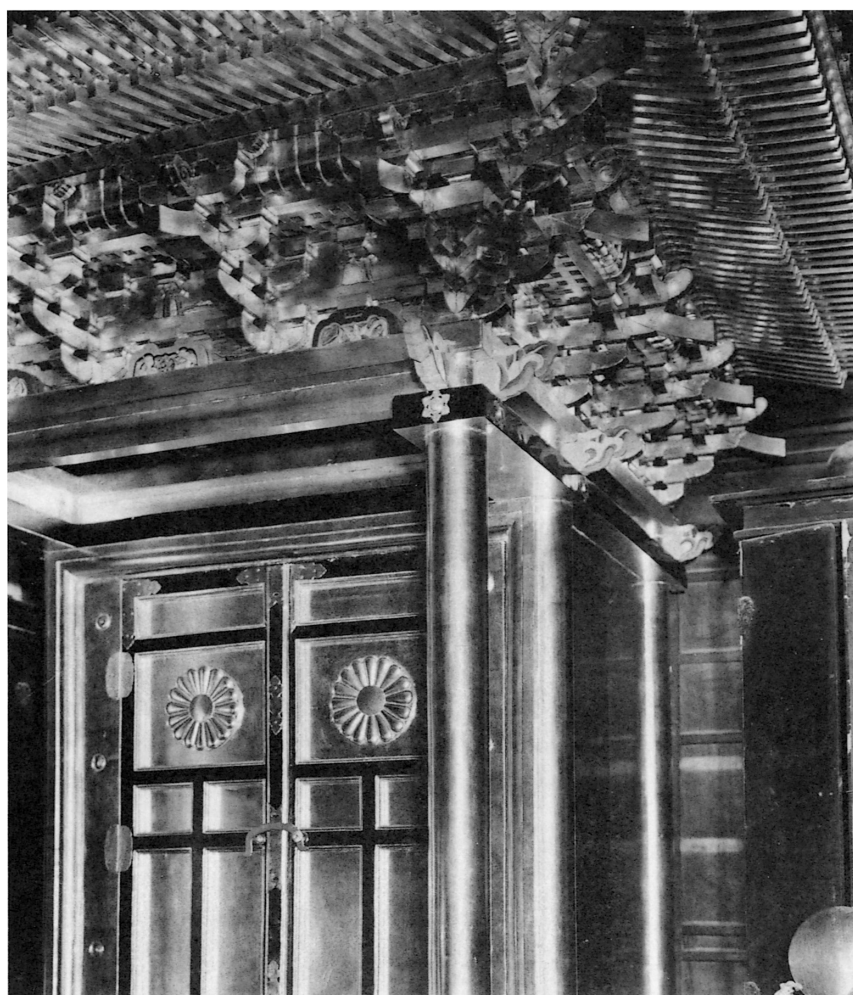
98

竣工
正面軒廻詳細



99

竣工
斗拱詳細



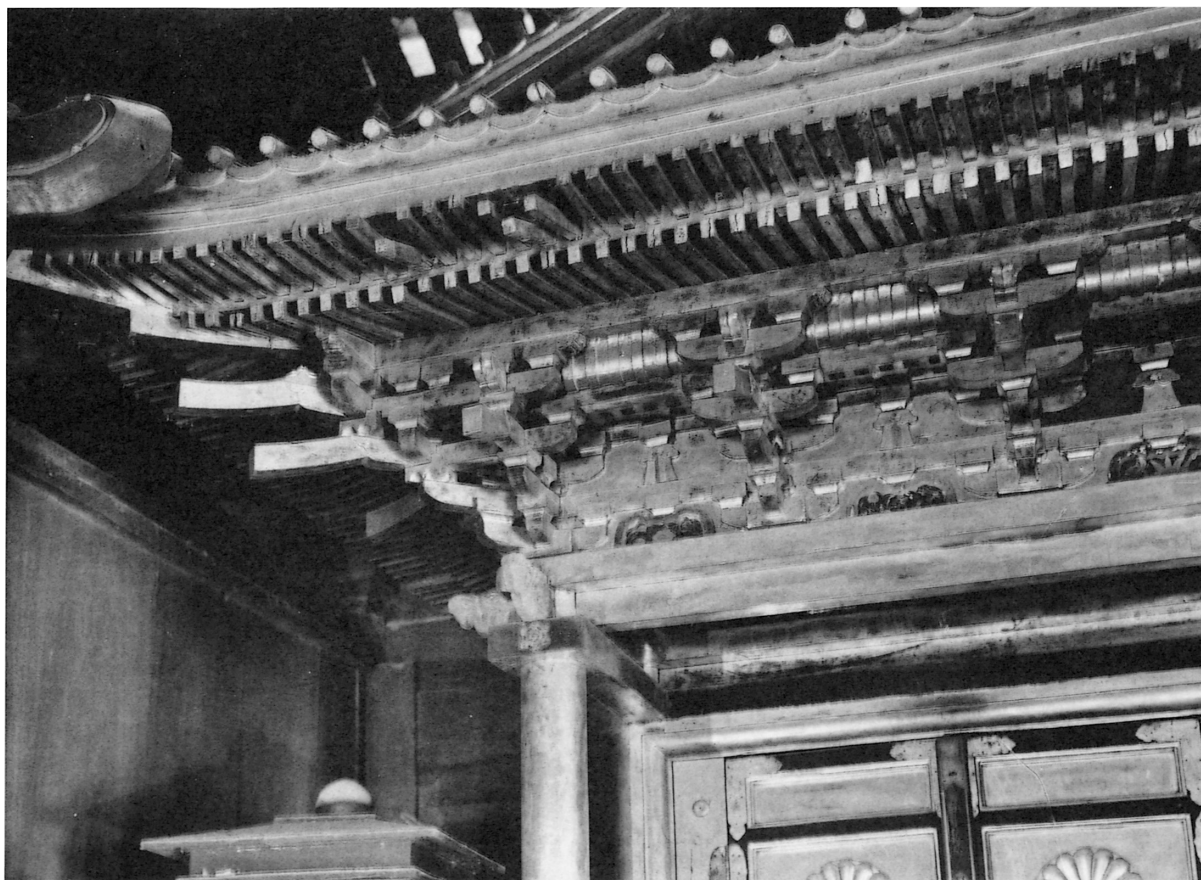
100
修理前
正側面



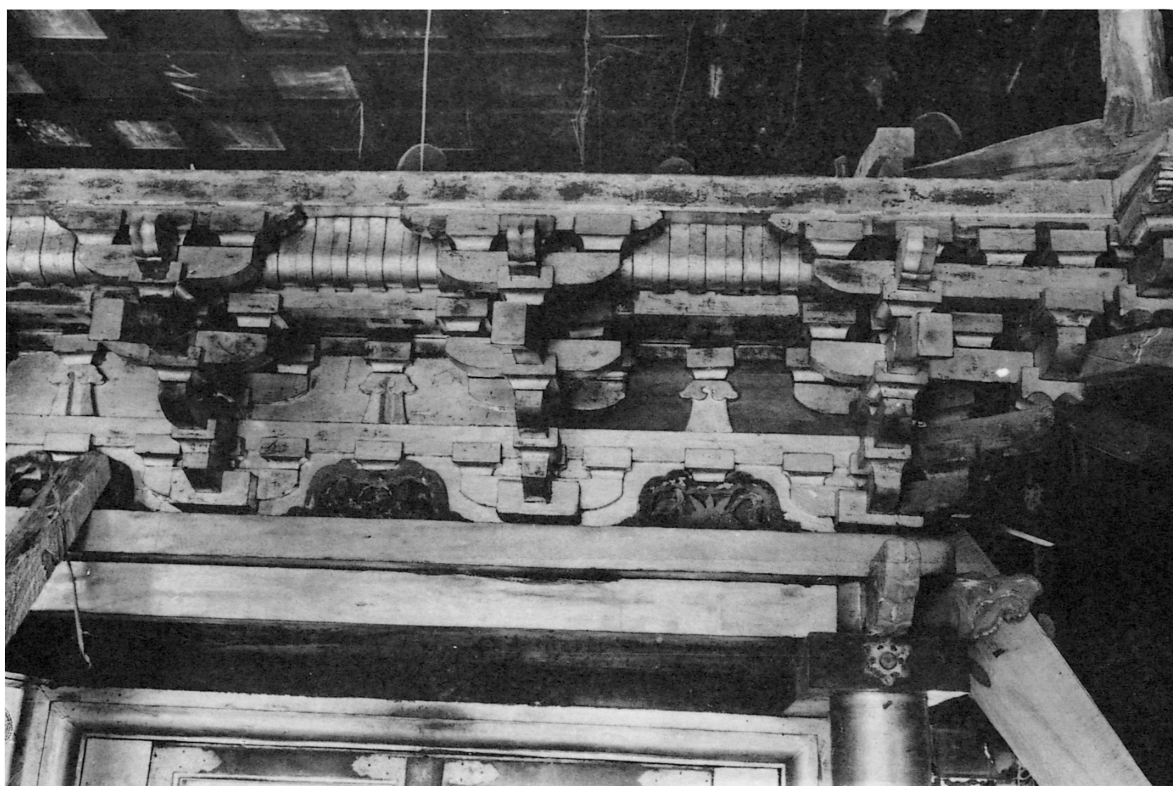
101
修理前
正面



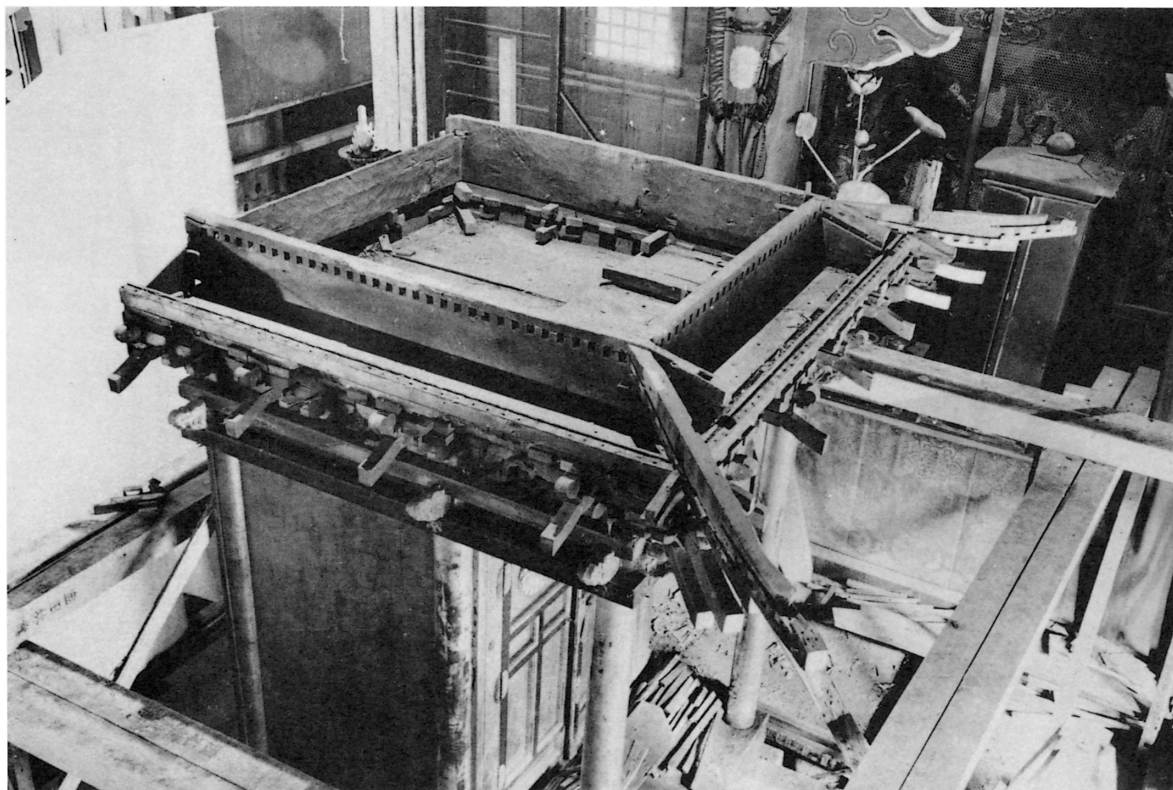
102
修理前
軒廻詳細



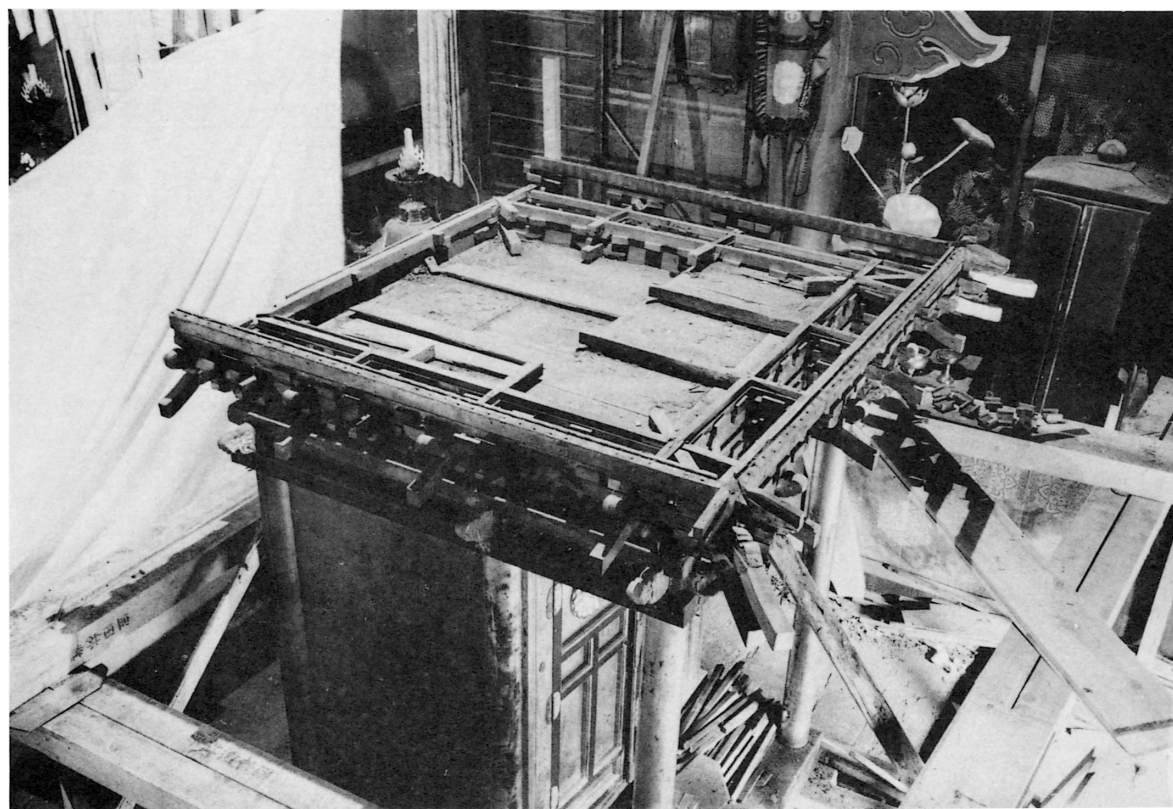
103
修理前
斗拱詳細



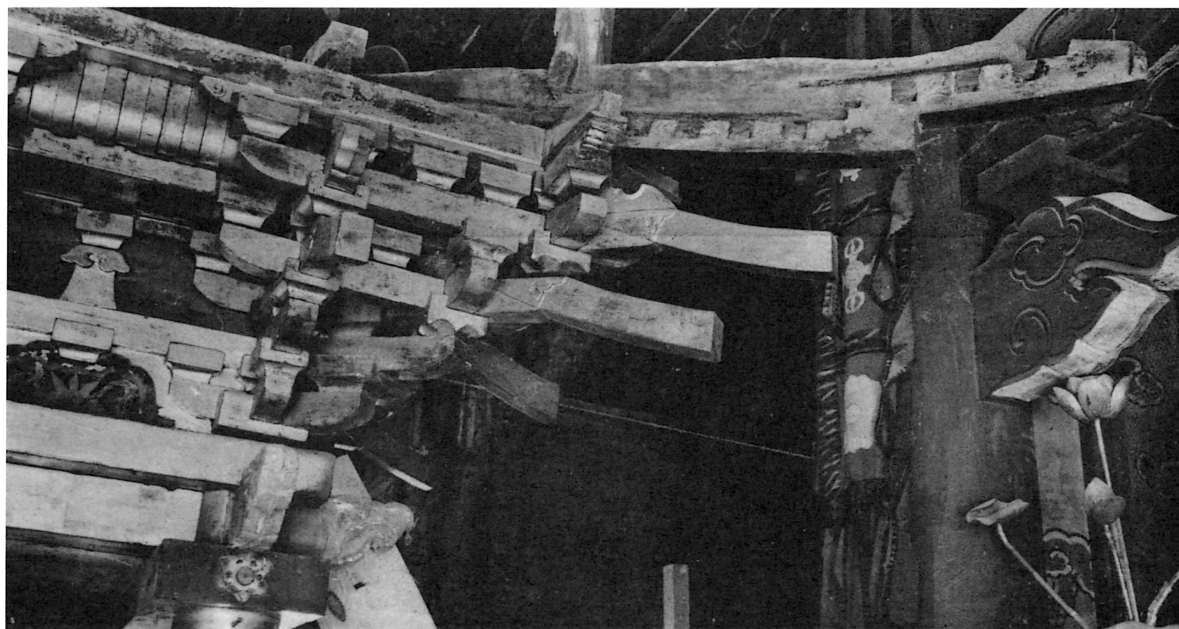
104 解体 隅木、榑掛、天井裏の納り



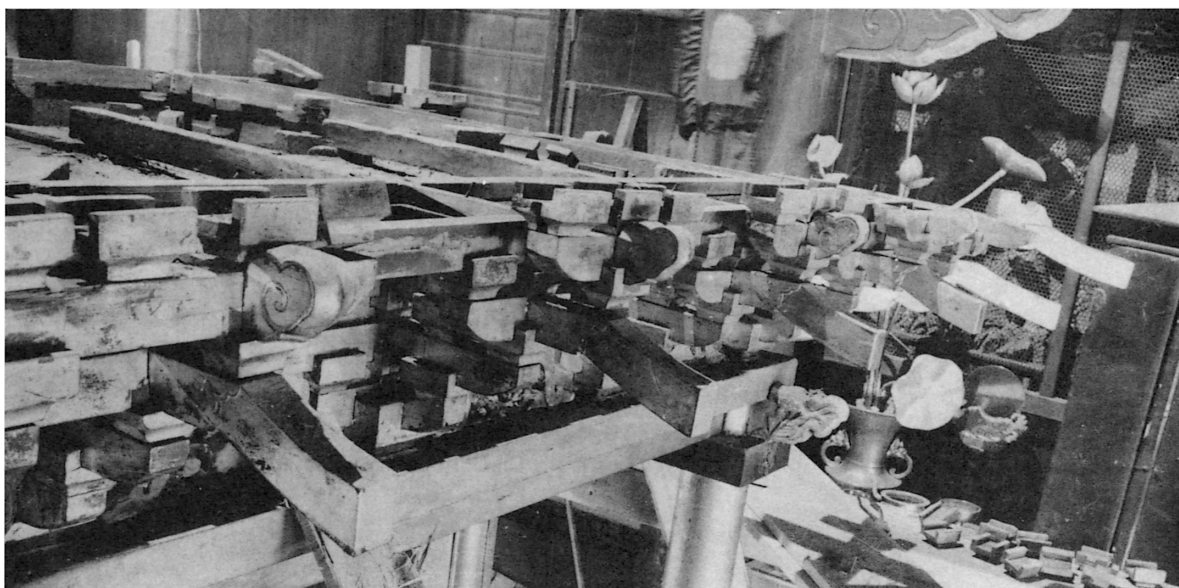
105 解体 桁、通肘木、小屋裏内の納り



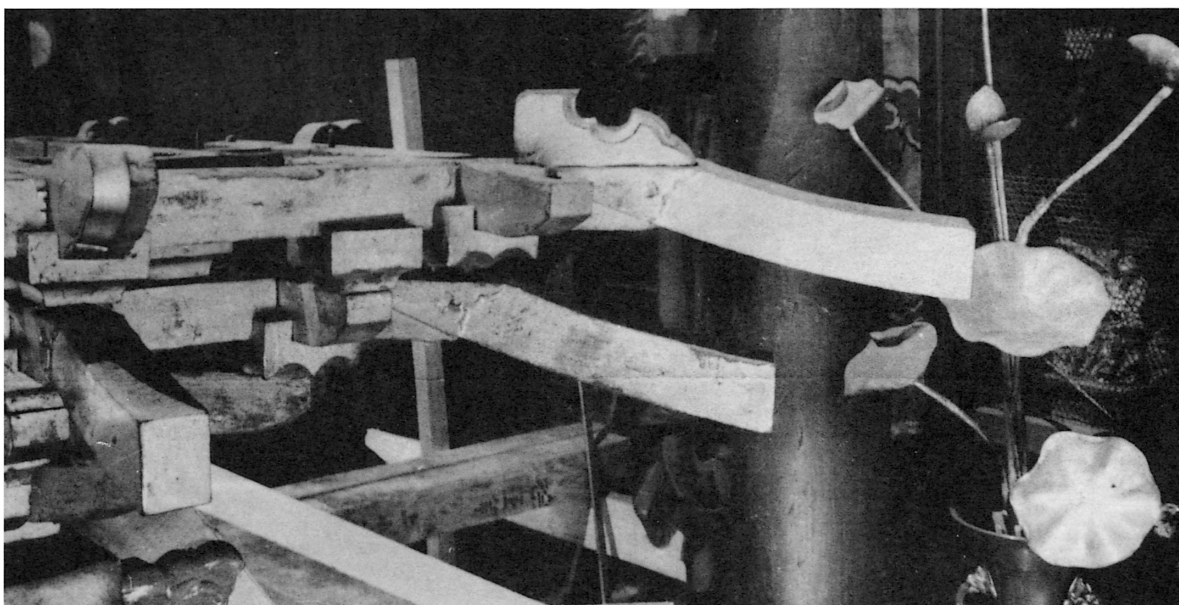
106
解体
隅斗拱詳細



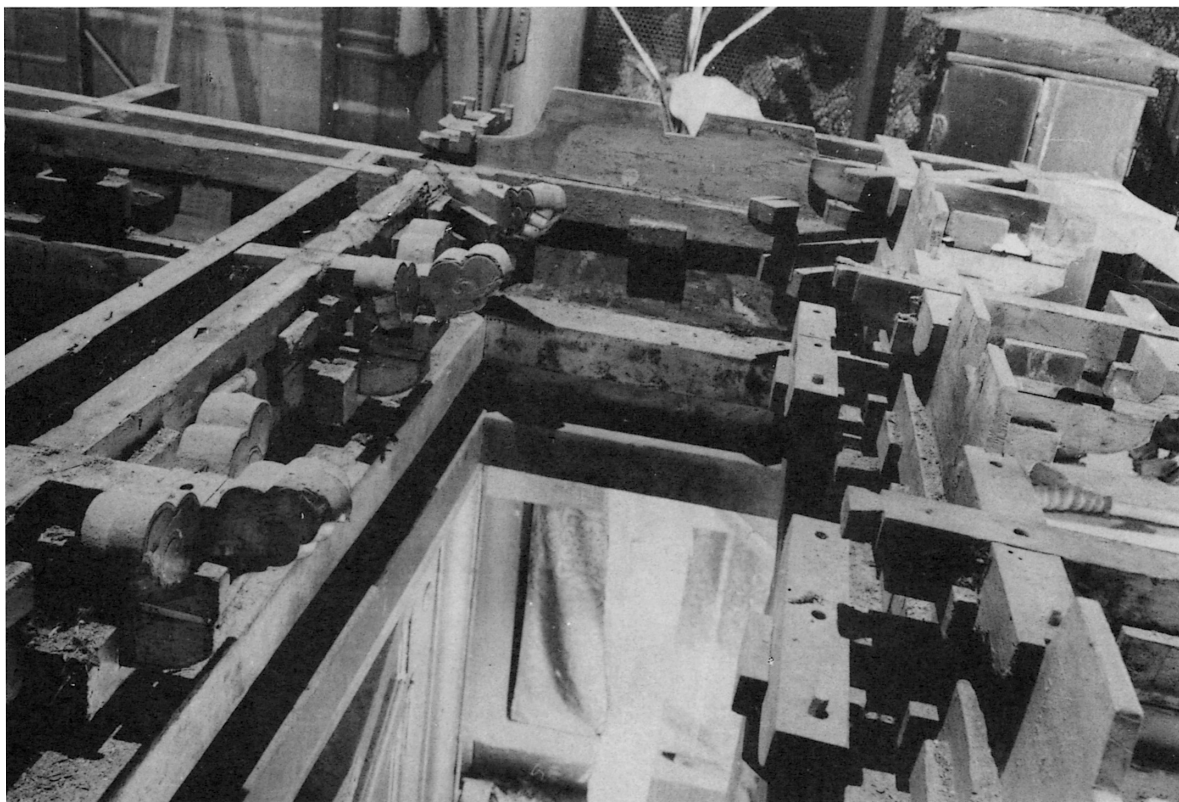
107
解体
斗拱詳細



108
解体
隅尾樑、菊斗



109
解体 斗栱、拳鼻の納り



110
解体 斗栱、尾極の納り

